

文禄・慶長の役(壬辰倭乱)

六反田豊／田代和生・吉田光男・伊藤幸司・橋本雄・米谷均・北島万次

- 一、はじめに一戦争の呼称について
- 二、戦争の原因・目的・動機
 - 1、戦争の原因・目的・動機
 - 2、1950年代～70年代の研究史
 - 3、1980年代～2000年代の研究史
- 三、戦争の経過と実態
 - 1、戦争の経過
 - 2、戦争を支えた日本の状況・諸勢力
- 四、開戦期の講和交渉
- 五、降倭・義兵・被擄人
 - 1、降倭
 - 2、義兵
 - 3、被擄人
- 六、今後の研究課題
 - 1、朝鮮側・明側の兵糧供給システムの究明
 - 2、被擄人の実態と送還システムの解明
 - 3、倭城の研究
 - 4、戦争による朝鮮社会の変化
 - 5、豊臣政権の戦略的思考に関する研究
 - 6、東アジア国際秩序、とくに「冊封体制」に関する再検討

一、はじめに一戦争の呼称について

豊臣政権による朝鮮侵略については、様々な呼称がある。日本では、当時、「朝鮮陣」「高麗陣」などと呼んでいたが、その後、幕末・明治初期から「征韓」「朝鮮征伐」などと呼び始めた。しかし1910年、韓国併合によって朝鮮人を同胞と見なすようになったことから、「朝鮮征伐」の表現は避けられ、かわって第一次出兵(1592～93年)を「文禄の役」、第二次出兵(1597～98年)を「慶長

の役」、総じて「文禄・慶長の役」という呼称が定着した〔石原道博1950・1951・1964〕。最近では、北島万次が「朝鮮侵略」という呼び方を使い、これが一般化している〔北島万次1990〕。一方、韓国側では「壬辰倭乱」「丁酉再乱」、中国側では「万曆朝鮮役」「万曆日本役」などと呼ぶことが多い。

二、戦争の原因・目的・動機

1、第二次世界大戦前までの研究史

豊臣政権がなぜ朝鮮侵略を行ったのか、という原因・目的・動機を探る議論は、すでに江戸時代からあった。たとえば北島万次が指摘するように、堀正意・林羅山らによる‘愛児鶴松の夭逝による鬱憤を晴らそうとした’という説や、貝原益軒・頼山陽らの‘有力諸大名の戦力を殺ぎ、同時に彼らの功名心を満足させるために海外侵略を企図した’という説である〔北島万次1990〕。この段階では、戦争の細部にわたる客観的史料に乏しく、多分に秀吉個人の意向から出たものという議論に集約させていた感がある。

これが明治期以降になると、日本の近代国家形成に伴い、対アジア侵略の先例として、この戦争が取り上げられるようになる。そうした風潮のなか、「勘合貿易復興説」という学説が提起される。すなわち、‘秀吉が日明勘合貿易の復活を望み、朝鮮にその斡旋を依頼するもこれに応じず、出兵した’というものである〔辻善之助1917・1930〕〔田中義成1925〕。これが、いわゆる「朝鮮征伐史観」につながっていく素地を作る。

そのいっぽう、実証主義の視点から、この学説にはすぐに異論が提出される。朝鮮史・満州史研究の礎を築き、文禄・慶長の役の全体像を初めて描き出した池内宏は、この辻・田中らの勘合貿易復活説を批判し、秀吉の功名心こそが朝鮮侵略に至る原因だと主張する〔池内宏1914a・1936a〕。とくに〔池内宏1914a〕は、秀吉の対朝鮮認識と、朝鮮との仲介役を命じられた対馬島の宗氏の行動の不一致を指摘する。たとえば、秀吉は薩摩の島津氏が琉球を「押さえて」いたと同様、宗氏が朝鮮を押さえていたと誤解し、朝鮮の入朝を求めるものの、宗氏がこれを1590年通信使の来日へとすりかえていく。また秀吉は、自分のもとへ礼を申し出ない明を「征伐」(征服)するべく、朝鮮に「证明嚮導」(明国征伐の道案内)を命じるが、再び宗氏がこれを「仮途入明」(明国入国のための道案内役)というソフトな表現へすりかえて交渉を行ったことを初めて明らかにする。

この研究に影響を受けたと思われる〔徳富蘇峰1921～22〕も、辻・田中両説を批判して、秀吉の朝鮮侵略の動機は征服欲にあったとする。さらに、〔田保橋潔1933〕〔中村栄孝1935・1969a〕も勘合貿易復活説を批判し、秀吉の領土拡張志向と宗氏の欺瞞工作に注目している。

以上のような、池内の「功名説」、徳富の「征服説」、田保橋・中村の「領土拡張説」などいずれの学説も、秀吉の関心は貿易レヴェルにとどまるものではなく、豊臣政権の領土拡張策であったという点で一致している。とくに田保橋・中村らは、‘勘合復活要求とは、明征服を断念せざるを得なくなった段階で、講和の一条件として提示されたにすぎないのであって、大陸征服構想こそが主

眼であった’と主張し、従来説を明快に批判している。このように、近代歴史学における原因論は、勘合貿易復興説と領土拡張説との二項対立の枠組みで展開していたことが分かる。

2、1950年代～70年代の研究史

太平洋戦争の終結後、日本国内では戦前の皇国史観への反省・反動から、逆に民衆を重視した歴史観が大勢を占めるようになる。とりわけ戦時中のマルクス主義への禁圧が解除されたことから、マルクス史観を公然と掲げる戦後歴史学の勃興の時代を迎える。なかでも1950年代、日本の歴史学界を巻き込んだ「太閤検地論争」(秀吉時代全国規模で実施された検地により、領主経営・土地所有・農村社会のありかたなどをめぐって行われた論争)の影響を受け、豊臣政権論という枠組みのなかで文禄・慶長の役に対する議論が深められていく。

戦後、初めて新たな視点から原因・目的・動機を探る問題を提起したのが、鈴木良一である〔鈴木良一1952〕。鈴木の本論は、第1に、中世の土一揆以来の民衆のエネルギーをはぐらかそうとする日本の領主階級の狙い、第2に、ヨーロッパ商業資本(ポルトガル・オランダなどの西欧勢力)に対抗する豪商の意向、その両者の期待を一身に受けた豊臣秀吉が専制化を強め、「民族的抵抗」の問題にすり替えて、明の冊封体制からの独立を宣言し、その延長の一つがこの戦争へつながったとする。

鈴木説の第1の、海外派兵をしようとする‘内側の論理’については、岩沢愿彦の実証研究へと受け継がれていく〔岩沢愿彦1962〕。岩沢の主張によると、豊臣政権には知行拡張を求める動き、それから派生する内部矛盾を解消するため、大陸征服の意図が秀吉の関白就任直後から常に存在していた、というのである。この岩沢説は、〔佐々木潤之介1965〕〔朝尾直弘1964〕〔藤木久志1974〕〔高木昭作1985〕らによって、さらに補強される。いずれも、文禄・慶長の役は、豊臣政権による全国統一事業の一環であり、あるいはその延長線上にあるもので、対外侵略への志向を常に抱えていたというのが基本的な理解である。

鈴木説の第2の、ヨーロッパ勢力の東漸を迎えた東アジア情勢、つまり‘外側の条件’については、16～17世紀の日本をめぐる対外関係史研究によって、実証研究が積み重ねられていく。前述した池内宏・中村栄孝の研究のほか、とくに1960年代に入って、〔田中健夫1961・1966・1975〕〔佐々木潤之介1965〕〔朝尾直弘1969〕〔三鬼清一郎1966・1968〕〔山口啓二1974〕らの研究が輩出する。これらの諸説を総合すると、①明の冊封体制を東アジアの内側から破綻させる後期倭寇の動き、ポルトガルの進出(荒野泰典の表現を借りれば「倭寇的状况」〔荒野泰典1987])などにより、明の冊封体制が弛緩した、②日本においては明の冊封下にあった中世国家が崩壊し、戦国動乱を統一してその中世国家を止揚した豊臣政権が明帝国からの自立を志向し、さらには東アジアの征服を目指した、ということになる。こうした見解は、豊臣期を「国際的国家主権の確立」と評価する説〔佐々木潤之介1970〕、あるいは「プロト国民国家の成立」と見る説〔勝俣鎮夫1996〕へと受け継がれていく。

3、1980年代～2000年代の研究史

1980年代、豊臣政権論に新たな見解を打ち出したのが〔藤木久志1985〕である。藤木は、豊臣政権による国内矛盾の解消プロセスを、「戦争」としてのみ捉えることに疑問を投げかける。豊臣政権の全国統一の基調を、軍事的征服だけでなく、惣無事令(大名間などにおける私的闘争の禁止令)・刀狩令・海賊停止令など、相次いで発令されたいわゆる「豊臣平和令」と総称する‘私闘の停止’あるいは‘平和の創出’と捉え直したのである。

こうした理解に基づいて、藤木は、かつての「勘合貿易復活」説と「領土拡張」説とを、まったく別の角度から検討する。つまり豊臣政権は、明国へは勘合復活を基調とし、朝鮮国へは惣無事令の適用(支配領域への組み込み)を政策基調としていたとする。したがって朝鮮に対する‘征伐’(征討)は、日本への服従をしなかったことに対する行動の現れであり、ここでは勘合貿易復活云々は関係なかったと主張する。

しかしながら室町時代中後期以降、日明関係の潤滑化のために、室町幕府や京都五山(京都臨濟宗の5大寺、天竜寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺の総称)は日朝関係というバイパスを利用してきた事実がある(→「朝鮮通信使(中世編)」研究史を参照)。つまり藤木説のように、日明・日朝両関係を完全に区分けして、勘合復活問題(日明関係)を朝鮮侵略と無関係だとするのは、当時の東アジア国際情勢から考えていささか無理があるように見える。さらに藤木説では、「豊臣の平和」という‘内側の論理’でしか戦争の動機・目的・原因を説明できない、という難点がある。

そこで‘外側の条件’——東アジア地域史の前提的展開——が、具体的にどのように文禄・慶長の役へ帰結していったのか、という問題提起に挑んだのが米谷均の一連の研究である。まず米谷は、田代和生とともに16世紀段階の対馬による偽使派遣体制を構造的に明らかにし、戦国時代から織豊政権の統一過程に関する情報が、朝鮮に向け意図的に隠蔽されていたことを解明した〔田代和生・米谷均1995〕〔米谷均1997〕(→「偽使」研究史を参照)。つまり、①朝鮮王朝側が豊臣秀吉の存在を侵略直前まで知りえなかったこと、②それゆえ、よもや日本軍が朝鮮を侵略してこようとは予想もできなかったこと、などが判明したのである。ここに、朝鮮王朝が日本軍にたやすく踏み込まれてしまった客観的背景が明らかにされるに至る〔村井章介1999〕。

次に米谷は、東アジア海域の「倭寇的状况」が、どのようにして戦争に帰結したのかというメカニズムを解明しようと試みる。そこで当時、環シナ海地域に暗躍していた朝鮮人海賊の沙火同なる者の縛送一件(小西行長らの指示によって実行された)に注目し、こうした豊臣政権の海賊停止令(初令は1587年、〔藤田達生2001〕参照)の実現があつて初めて、朝鮮王朝(宣祖朝)側が秀吉について内外の平和を掌握したものと理解し、これがやがて戦争へ直結する1590年朝鮮通信使の日本派遣へつながったと指摘する〔米谷2002b〕。

以上の藤木・米谷らの研究成果により、文禄・慶長の役の原因・目的・動機については、かなり明確にされたと言えよう。なお豊臣秀吉が大陸征服の意志そのものを持ったのが何時か、という問題については、〔岡田正之1905〕が1586年としたのに対し、〔岩沢愿彦1962〕が「伊予小松一柳文書」をもとに1585年説を唱え、これまでの通説となってきた。ところが最近、堀新により1582年、す

で織田信長が「唐入り」(大陸征服)の意図を持っていたことがルイス=フロイスの「イエズス会総長宛日本年報追信」によって再確認され、秀吉はそれを継承したに過ぎないということも判明した〔堀新2002〕。

三、戦争の経過と実態

1、戦争の経過

戦争の経過に関し、初めて実証的な研究を行ったのが〔木下真弘1893〕である。木下は、戦争の発端から1593年に起こった平壤の戦い直前までの出来事を、文献史料を駆使して初めて体系的に叙述した。ついで木下の後継者である松本愛重が、日清戦争勃発直後の国際情勢を背景に、戦意高揚を意図した文禄・慶長の役に関する史料集を刊行し、堀正意の『朝鮮征伐記』、吉野甚五左衛門(松浦鎮信の家臣)の『吉野日記』、僧天荊(妙心寺派の禅僧)の『西征日記』などを紹介した〔松本愛重1894〕。ただしこの段階の研究では、史料といっても記録類の編纂史料が中心である。

しかし1900年代に入ると、黑板勝美は高野山に島津氏が建てた供養碑の存在を明らかにしている〔黑板勝美1905〕。この碑は、単に全羅道南原・慶尚道泗川での島津軍の戦勝を誇示するためだけではなく、戦死した島津家家臣や対戦相手の朝鮮・明の兵士などを弔うものでもあったとされる。島津家には編纂記録である『征韓録』など、多くの‘軍記物’が存在する。だが黑板の研究は、戦勝誇示を強調する後世の編纂書よりも、供養碑という現存資料に注目することの重要性を喚起し、そこから戦乱期の人々の心情を探ろうと試みた。

この黑板の研究と同時期、史学会が蒙古襲来と文禄・慶長の役に関する「偉績」を称える目的で論文集を刊行し〔史学会1905〕、そのなかに戦争の実態に迫ろうとする個別実証論文が多く含まれている。たとえば、〔岡田正之1905〕は、開戦直前の軍役割の計画、本営名護屋城の築城、諸大名渡海の具体的指示などを明らかにし、日本・朝鮮・明の武器の実態などを比較した。〔三浦周行1905〕は、朝鮮出兵軍に対する秀吉の軍律を取上げた。〔辻善之助1905〕は、安国寺恵瓊が朝鮮から安国寺に送った書状を紹介し、朝鮮侵略における禅僧の役割について触れている。すなわち、①恵瓊が朝鮮人に「いろは」を教えたことから、国語(日本語)の勢力の伸張を意味し、豊臣軍が同化政策をも兼ね備えていたと評価する。さらに②恵瓊ら従軍僧は、朝鮮国内で書籍の略奪に腐心していたばかりでなく、③侵略計画を具体化する時点で、西笑承兌や玄圃靈三、惟杏永哲ら五山禅僧の高僧を秘書的参謀として幕下に置いていたことに注目する。〔藤田明1905〕は、秀吉が所持していたという日本・朝鮮・中国の3国を描いた扇面について分析を加え、慶尚道を白、全羅道を赤、京畿道・忠清道を青、平安道・江原道を黄、咸鏡道を黒、黄海道を無色に塗っていたことを初めて明らかにしている。これは、朝鮮古地図研究史の視点からみても重要な指摘といわねばならない。〔芝葛盛1905〕は、鍋島直茂が咸鏡南道で朝鮮人民から租税を取り立てるために作成した「朝鮮国租税牒」を初めて紹介した。いずれも戦意高揚を目的としながらも、い

っぽうで古文書類を多用し重要な論点を掘り下げた実証的研究といえる。

その後、さらに画期的な実証研究を発表したのは、池内宏である。〔池内宏1914a・1936a〕は、文禄・慶長の役の全体にかかわる研究であり、戦争の動機から経過を詳細に解明している。この研究の特徴は、日本側史料だけでなく、多数の朝鮮側史料を用いた点にある。〔参謀本部1924〕は、この池内の業績をうけ、より詳細に戦争の具体的史実を確定している。逐日的な戦争の経過は、現在もなお両書に依るところが多い。

第二次世界大戦後、戦前の史観が批判される一方、実証的な部分ではさらなる深化が遂げられていく。先述した鈴木良一の研究は、戦争の経過を考える上でも無視できないものがある。鈴木は、これまで「文禄・慶長の役」の研究はあっても、「侵略と抵抗の歴史」は存在しなかったと従来の学説を批判し、朝鮮侵略に対する朝鮮人民の闘いを浮き彫りにした〔鈴木良一1952〕。これが、その後の日本における朝鮮史研究に与えた影響は計り知れない(→後述の「義兵」の項を参照)。

かつて日本の植民地時代、『朝鮮史』の編纂に携わっていた中村栄孝は、1960年代に研究の集約を成し遂げ、日本・朝鮮・中国の史料を博搜した実証的検証を飛躍的に高める〔中村栄孝1969a〕。中村の研究は、朝鮮王朝の外交文書史料集である『事大文軌』や、鄭希得(日本軍俘虏となった朝鮮人朱子学者)の『月峯海上録』、柳成竜(開戦時、朝鮮王朝の中心的人物)の『懲毖録』など、これまで以上に朝鮮側史料を積極的に紹介・活用している点に特徴がある。とりわけ、日本軍として参戦しながらも朝鮮側に投降した倭将(日本人の武将)金忠善(日本名「沙也可」)の存在を初めて実証し、その伝記『慕夏堂文集』を紹介・解説したことは特筆される(→後述の「降倭」の項を参照)。

戦争の経過に関する研究は、さらに北島万次によって深められていく。北島は、従軍武将である田尻鑑種の『高麗日記』を発見し、この史料に基づいて中間層クラスの視線からみた前線の様子を明らかにする〔北島万次1973・1982〕。さらに北島は、文禄・慶長の役に関する先行研究を渉猟するとともに、『朝鮮王朝実録』などの朝鮮側の史料や『両朝平攘録』など明側の史料、さらに新たに発見した日本側の史料——とくに日記類・記録類——をバランスよく組み合わせることによって、戦争の実態を多面的かつ立体的に描き出すことに成功する〔北島万次1990・1995・2002a・2002b〕。加えて朝鮮側の基本史料でもある李舜臣(朝鮮の水軍統制使)の『乱中日記』を初めて日本語に訳注するなど〔北島万次2001〕、この分野の研究発展に大きく寄与することになる。

このほか〔村井章介2000〕は、薩摩藩士を中心に、参戦した兵士たちの回顧録を調査し、彼らの記憶の中の文禄・慶長の役を再現してみせている。また〔米谷均1996〕は、戦争の経過をより立体的に復元するために、欧文史料ことにキリシタン関係史料の活用が重要だと主張する。とりわけ、ルイス=フロイスの『日本史』は、文禄の役に関する記述が多く、日本側史料ではなかなか追えない小西行長に関する貴重な情報源ともなる。キリシタン史料を活用した研究としては、〔柳田利夫1982〕がある。この研究は、中国から朝鮮に布教活動を広げたいとするイエズス会の意向を検討し、さらに小西行長の要請によって朝鮮へ渡った初めての宣教師が、この戦役をどのように見ていた

かを明らかにしている。なおフロイスの関係史料は、[松田毅一・川崎桃太1974]にまとめられているが、日本人名の比定など若干後考を要する部分がある。

なお戦争の経過を追っていく上で見逃すことができないのが、倭城の問題である。倭城とは、参戦した諸大名が朝鮮半島南部各地に築いた、日本式の山城のことを指す。倭城についての研究は、かつて戦況の分析のなかで扱われることが多かった。[鈴木圓二1905]は、加藤清正・浅野幸長の蔚山籠城と明軍撃破の背景に関して分析を加え、さらに朝鮮各地で行われた戦争の分析が進むなかで、倭城に言及するものも輩出した[参謀本部1924][伴三千雄1925b][池内宏1936a][李焜錫1977]。

その後、織豊政権の研究の高まりと呼応し、八巻孝夫が代表編纂した倭城研究[倭城址研究会1979・1980]の刊行により、この分野はさらなる関心を集めた。なかでも[李進熙1984]は、晋州・熊川・蔚山・順天などに現存する倭城跡を実際に歩き、朝鮮側の軍事拠点とあわせて分かりやすく解説している。やがて1990年代後半に入り、戦国から織豊期にかけての城郭(いわゆる「織豊系城郭」)の構造に関する研究が進むにつれ、確実に建築時期の比定ができる倭城への関心が高まる。すなわち韓国南部に散在する倭城は、豊臣期の日本式城郭がそのまま‘詰め込み’されたものだという発想である。なかでも、最近の城郭研究の進展を導き出した縄張図の手法([千田嘉博2000]を参照)により、倭城の景観の概要をつかめるようになったことは大きな収穫である。

こうした問題関心の延長から、近年、倭城の総合的研究が継続して出されるようになり、1997年より倭城の専門雑誌『倭城の研究』の刊行が始まった。これによって、倭城は文献史・考古学・建築学など、学際的な視角から研究が行われている。その中でも、[黒田慶一2002][高田徹2002]などに見られるように、大阪の城郭史懇談会を中心にした研究活動により、これまで巨済島・順天・釜山・西生浦・金海竹島・南海・安骨浦・熊川などの倭城が取り上げられ、遺構や遺物の調査によって当時の倭城のありさまが窺えるようになってきている。また、倭城の保存状態、さらに今後の課題を報告した[服部英雄1998]によると、倭城を取り囲む環境は、近年の急激な開発により一変しつつあり、研究調査が急がれている現状にあるという。

2、戦争を支えた日本の状況・諸勢力

戦略行為を支えた、当時の日本の国内情勢や諸勢力の動きも重要な研究課題である。これに関しては、豊臣政権の評価をめぐって研究が進められている。なかでも豊臣政権の軍役体系(大名等へ課せられた軍事協力の義務体制)を実証的・具体的に検討した[三鬼清一郎1966]は、この戦役を全領主階級を包摂した「統一的軍役体制」の完成によって初めて実現可能になったととらえる。この三鬼の研究と同時期、中村質は軍役を課された九州諸大名の対応を究明し、その実働員数が豊臣政権の要求値を下回るものであったこと、過重な軍役負担による財政窮乏が、九州諸大名の全国市場、とりわけ上方(京都・大坂周辺の地域)資本への依存度を高めていったことなど、日本軍の前線基地が置かれた九州諸大名の動向について注意を喚起するよう指摘している[中村質1966]。

その後森山恒雄は、兵站(人員・食料などの補給機関)への供給基盤が豊臣政権の九州の蔵入地(直轄地)であったことに注目し、その検出を通じて九州が「五畿内(近畿地方中央部)同前」体制(政治的中心地域と同じ強固な支配体制)へ組み込まれていったという評価を与えている〔森山恒雄1983〕。つまり戦争を契機に、九州の日本統一への組み込み・平準化がなされたと指摘する。また田中健夫は、とくに対馬島に視座を据え、対馬の宗氏が旧来から朝鮮と特殊な関係にあり、戦争に際して独自の役割を課されたことを解明し〔田中健夫1975〕、個々の大名の側からこの戦争を捉える視点を打ち出す。これに先立ち、田中は博多を拠点とする豪商の島井宗室の動向を詳細に検討し、朝鮮出兵そのものに反対した島井の立場からみて、豪商勢力が必ずしもこの戦争に直結しなかったことを明らかにしている〔田中健夫1961〕。

九州諸大名のなかで、対馬島宗氏とは別に、大大名である島津氏の果たした役割も重要である。北島万次は、島津領国内で実施された太閤検地に注目し、これによって朝鮮への出兵体制が固まったと主張する〔北島万次1977b〕。しかしこれに対して山本博文は、島津氏が具体的に軍隊をどのような方法で動員していったかを追求し、そのころの島津氏の権力はまだ強大な家臣団を完全に掌握できなかったこと、兵農が未分離であったことなどを見出し、北島説を批判している〔山本博文1983〕。

九州に比重を置きつつも、より全国的な規模で、かつ社会経済史的な側面でこの戦争の背景を解明しようとする動きもある。〔新城常三1943〕は、日本各地の廻船業者が兵站地への物資輸送を通じて巨大な利潤を蓄積し、江戸時代に入って初期豪商として活躍するようになったことを指摘する。〔池享1995〕もまた、全国的な流通が文禄・慶長の役を契機に、急激に成長したと想定する。さらに〔中野等1999〕は、議論が多岐にわたるものの、戦争遂行に絡む兵糧米の輸送体系を、制度的に明らかにした点で最大の功績がある。概して、朝鮮侵略という軍事行動が、未曾有の財の集中や分配、流通や商業の発達を招いたことが指摘されており、軍事や戦争のもたらす経済効果という普遍的なテーマを導き出している。この他、盗みや人さらい、人身売買など、戦場における様々な人々の行為、とくにこの時期の社会的な延命処世術の高さに注目した〔藤木久志1995b〕の指摘も、戦争とそれを背後で支えた社会とのかかわりを見ていくうえで重要である。

水軍・造船・水運に関わる研究は、海事史的な視角から重要な課題として浮上してくる。先述した〔参謀本部1924〕はその早い例であるが、〔渡辺世祐1935〕は中世海賊(伊勢水軍など)の発展形態としての豊臣期の水軍や造船事業を明らかにしている。また有馬成甫は、自らが海軍大佐であるという立場から、第一次出兵段階で豊臣政権の海戦研究が不十分であったこと、その反省から第二次出兵の際、安宅船の造船を含めて水軍戦略の研究に努めたことを説明している〔有馬成甫1942〕。第二次世界大戦後になると、こうした研究を批判的に受け継ぎ、豊臣政権による水軍編成を「海における兵農分離の体制的実現」と規定した、〔三鬼清一郎1968〕が発表されるに至る。

軍事史・兵器史的な研究は、1980年代以降、急速に発展する。すなわち吉岡新一や宇田川武久による、日本・朝鮮・明の三国間における火器の比較研究である。吉岡は、朝鮮・明軍は大砲と艦船に優っていたことを指摘する〔吉岡新一1983〕。とくに、朝鮮軍が軍船に搭載した天宇銃筒・

地字銃筒・玄字銃筒などの重火器が威力を発揮し、日本軍に打撃を与えたといい、また朝鮮を救援した明軍の仏郎機・大將軍砲・威遠砲などが日本軍の脅威の的となったという。これに対して宇田川は、朝鮮が明の兵器・武技を修得して日本軍に対抗したが、やがて日本軍降倭(投降兵)などから鉄炮の製法などを学び、これらを自国の常用の武器としていったことを述べる〔宇田川武久1988〕。日本の鉄炮は「鳥銃」と呼ばれ、精度が格段に高かったというのである。その後、北東アジアから東南アジアに及ぶ兵器交流の歴史を精査した宇田川の研究は、〔宇田川武久1993〕に集大成される。

ところで先述した〔辻善之助1905〕にみられるように、豊臣政権の戦略的頭脳として活動した京都五山の高僧や、前線における各大家家づきの従軍僧の果たした役割も見逃すことはできない。これらの僧侶たちは、おもに朝鮮や明と交換する外交文書の作成にかかわっている。なかでも毛利氏の外交僧でありながら、豊臣政権を支える枢要として活躍した安国寺恵瓊の存在は重要である。この恵瓊については、伝記をまとめた〔河合正治1959〕がある。このほか〔八代国治1905〕は、鍋島直茂の従軍僧の是琢が、捕虜となった朝鮮王子の慰撫のため詩文の贈答を行ったことを紹介しており、従軍僧にも詩文の才能が期待されていたことが分かる。

戦時下での僧侶の活動は、近年になって研究がさらに充実しつつある。〔北島万次1989〕は、中世以来の伝統を引く外交僧としての五山僧の役割を詳細に紹介している。また〔米谷均1998〕は、以前から注目されていた朝鮮への渡海僧(のちの従軍僧)天荊の三冊の日記(『右武衛殿之使朝鮮渡海之雜藁』・『朝鮮往還日記』・『西征日記』)を初めて総合的に分析している。ここでは、天荊が対馬宗氏の渡海僧であった時代から従軍僧として活動するまでの素顔を明らかにしており、局面の展開にしたがい日記の文面に朝鮮を侮蔑するような表現が目立つようになったことなども指摘されている。ただしそのころ博多から対馬あたりの玄界灘地域で主に活躍していたのは、臨濟宗幻住派の禅僧たちが中心であり、この幻住派の僧侶が各地に形成した法系(同一宗派の系統)組織という視点から従軍僧の活動を統一的に捉えたのが、〔伊藤幸司2002〕〔橋本雄1999〕である。16世紀から17世紀初期までの「偽使」の横行は、まさにこの幻住派の僧侶たちの活動と符合しており、彼らの実態把握は重要な課題であるといえる(→「偽使」研究史を参照)。

四、戦間期の講和交渉

文禄の役と慶長の役の戦間期(1593～96年)に、日本と明との間で講和交渉がなされたことは良く知られている。これに関する最も早い研究は〔三上参次1905〕で、1593年、肥前名護屋城において秀吉が提示した和議条件7箇条を明らかにしている。以来、講和交渉期の研究の多くが、この条文をどのように解釈するか論点が絞られている。つぎに、その和議条件の内容を示しておく。

- ①明朝皇女を天皇家と婚姻させること。

- ②勘合を復活し、官船・商船を往来させること。
- ③明・日本の大官による軍事的和平と通好の誓約を取交わすこと。
- ④朝鮮南部4道を日本へ割譲すること。
- ⑤人質として、朝鮮王子および大臣1～2人を渡海来日させること。
- ⑥俘虜となっていた朝鮮国王子2人を返還すること。
- ⑦朝鮮王朝の権臣は誓詞を提出すること。

ここにある条件②から、[辻善之助1917][田中義成1925]が秀吉の朝鮮侵略の目的・動機を論じたことは、すでに前に述べた通りである。これに対して、[田保橋潔1933]はむしろ条件④に注目することによって、秀吉が当初抱いていた大陸征服構想、すなわち日本・朝鮮・明三国の国割計画に失敗したため、譲歩してこの和議条件になったのだと理解する。つまり、秀吉の意図がこの和議条件によってさらに明確になったとするもので、この説は[中村栄孝1969a]にも受け継がれている。

近年の研究動向としては、条件②にある「勘合」の持つ意味をどのように解釈するかが問題視されている。かつて[中村栄孝1966]は、「勘合」を明側からわたされる符驗(通行証)であると解釈した。これに対して[藤木久志1985]や[北島万次1999]は、「勘合」=明との貿易状態の復活ととらえ、具体的な渡航証としては「秀吉の渡海朱印状」を考えていたのではないかと推測する。一方、[金文子1994]は、和議交渉時の日本側史料(『江雲隨筆』)に注目し、「金印勘合を以て照驗を為すべき事」という記事から、中村と同様、「勘合」=符驗(通行証)と解釈し、秀吉が室町時代のいわゆる日明勘合貿易の復活を求めたことは明らかであると指摘する。ただし藤木・北島説の具体化した「秀吉の渡海朱印状」なるものは、これまでに実在が確認されておらず、また金文子の説のように「勘合」の語を本来の日明勘合と解釈する余地もあり、この問題はいまだ残された課題といえる。

ところで戦間期の講和交渉は、日本・明ともに内部の政治分裂が激しく、これに交渉の枠外に追いやられた朝鮮王朝の必死の働きかけも加わり、そこに「偽使」「偽書」が三国間で飛び交うなど、きわめて複雑な様相を呈している。たとえば前出の[三上参次1905]によると、和議条件を秀吉は明国からの使節へ提示したとする。しかしながら実はこの使節は、明の宋応昌(兵部右侍郎文官)が幕下の策士(諜報機関)謝用梓らを「明使節」と詐称して送り込んだ一種の「偽使」と指摘されている([中村栄孝1969a][北島万次1995])。また、朝鮮側を無視して進められる沈惟敬(明の武将)と小西行長のルートに対抗し、惟政(松雲大師、朝鮮の義僧兵)が加藤清政との間に4回にわたる折衝を行っていたことが[貫井正之2002a][北島万次2002c][金栄作2002]らの研究によって明らかにされている。さらに沈惟敬と惟政による講和交渉のあり方を比較した[沈尚勝2002]によれば、戦乱期は明の対日懐柔策に抵抗する朝鮮の排撃的傾向がみられ、これが戦乱後になると逆に明の対日警戒姿勢に対する朝鮮の親和的態度、といった対比構造が顕著にみられると分析する。

講和交渉はやがて1596年に破綻をきたし、慶長の役が起きる。この講和の破綻理由について、これまで通説では明が秀吉の要求(和議7箇条)を無視し、日本国王に冊封しようとしたことに対する秀吉の激怒'とされてきた。これに対して、近年、山室恭子・佐島顕子・金文子らが異論を提出している。まず山室は、当時大坂城で起きた秀吉と冊封使との和議の決裂の様子を伝える史料が、半世紀も過ぎた江戸時代の儒学者や兵法家の手によって記録されたものであることを指摘し、事実が捏造されている疑いがあると判断する[山室恭子1992]。その上で、断片的な同時代史料を組み合わせ、秀吉が冊封使の来日を肯定的に受け容れていたことを明らかにする。山室によると、和議決裂の原因は、①明将沈惟敬が秀吉宛の返書に朝鮮からの日本軍の完全撤退を要求したこと、②朝鮮王子が朝鮮通信使と同行訪日しなかったこと、の2点により、秀吉の朝鮮支配が完全に否定されたことに対する怒りを挙げる。この視点は[佐島顕子1993・1994]にも、同様に受け継がれているところである。

一方[金文子1994]は、おおむね山室・佐島の結論を支持しながらも、明使が金印・官服とともに持参した「誥命(日本国王の任命状)」・「詔諭(日本国王の任命状)」・「勅諭(冊封理由などを明記した明皇帝の命令書)」を区別し、秀吉の怒りのありかを究明することが重要だと主張する。これによると、秀吉は「誥命」そのものは喜んで受け容れたが、「勅諭」の内容を読んで怒り、和議を破棄したというのである。すなわちこれによって、秀吉の知らないうちに小西行長が腹心の内藤如安を遣わし、明皇帝に「降表文」(勅書発令を願う書類)を上呈したことが窺え、しかもその「降表文」は、朝鮮からの撤兵などを明朝に誓約する内容であったとする。

ただし内藤如安による「降表文」の上呈、「誥命」や「勅諭」の内容等については、すでに[中村栄孝1966・1969 a・1973]が詳細に検討しているところである。複雑なことに、初めて明使の持参した①誥命・②詔諭・③勅諭は、使行途中で正使(李宗城)が逃亡するという不測の事態により、新たに正使(前副使の楊方亭)・副使(沈惟敬)名義の④誥命・⑤勅諭が追送され、秀吉へ伝達されている。このうち文面が判明するのは、旧使者名で文中に「平秀吉」名のある招諭(写本)と勅諭(宮内庁書陵部に現存)、それと使者名が無く文中に「豊臣秀吉」名のある誥命(大阪歴史博物館に現存)で、前者は旧本②・③、後者は①か④のいずれかと考えられる。新本⑤勅諭の正確な文面は、不明である。厳密な意味で「誥命」「勅諭」から秀吉の怒りを探るには、実際に大坂城で伝達された新本(④⑤)を念頭におき、果たして旧本と同文であったかどうか、書誌学的な面からの研究も含めた基礎的な作業が必要とされる。なお、明使が秀吉へ贈った官服は、京都の妙法院に現存しており、これを服飾史・染色史の視点から論じたものに[河上繁樹1998]がある。

戦間期ではないが、慶長の役末期にも講和問題が起こり、これを戦間期の講和交渉の延長線上としてとらえる[李啓煌1997]がある。この研究は、かつて[丸亀金作1938]がとりあげた戦争末期の明の外交問題を発展させたもので、①明廷内部と前線の双方における主戦派と講和派の対立構造を明らかにし、そのなかで②主戦派を支援する朝鮮王朝の姿勢、③小西行長らによって進められた撤兵・講和交渉の裏に、明・朝鮮軍による対馬侵略という危機回避工作がからんでおり、これが近世日朝関係を規定する「和好」「通好」体制の確立につながったと指摘する。また[関德基

2002]は、戦後講和交渉が明国の干渉なしに朝鮮王朝の専決事項として進められた背景に、北東部の女真族長ヌルハチの脅威の増大をあげ、このことが結果的に対馬を仲介とする通交回復を早めたと考察する(→「朝鮮通信使(近世編)」研究史を参照)。

五、降倭・義兵・被擄人

1、降倭

長期化する戦争のなか、戦線を離脱して朝鮮軍側に投降したり、戦闘中において捕虜となる日本人が数多く存在した。朝鮮側史料においては前者を降倭・投降倭・帰順倭などと言い、後者を生擒倭・被虜帰順倭などと称す[米谷均1996]が、ここでは便宜上、総称して「降倭」と呼ぶ。

降倭については、加藤清正の先鋒であった「沙也可」(金忠善、慕華堂とも号す)が良く知られている。その伝記『慕華堂文集』によると、従軍中、朝鮮の東土礼儀の習俗を見、中華文物の盛んであることを慕い、配下を率いて朝鮮側に投降、日本の「鳥銃」(火縄銃)を伝習させるなど対日本軍戦に活躍したという。しかしながら韓国併合の前後から、この沙也可の存在を国家主義的な観点から否定する学説が盛んになった。[幣原坦1904・1924][内藤虎次郎1915]は、ともに沙也可の事蹟を架空の偽作と断定し、また[青柳綱太郎1930]は、忠君愛国理念の旺盛な加藤清正の肥後藩においてそのような非国民が出る筈がないとして、やはり架空の存在と論断している。

ところがこのような非科学的な説は、間もなく中村栄孝によって明快に否定される。中村は『朝鮮王朝実録』の記事をもとに、沙也可の存在をあらためて実証してみせた[中村栄孝1933]。降倭についての中村の研究は、その後も精緻をきわめる。集大成された[中村栄孝 1969b]は、役後も朝鮮軍のため活躍する沙也可の姿を鮮やかに描き出し、その功績が認められて王朝から授職(官職を授けられること)され、名も金忠善と改めていく生涯を、現存する多くの史料の紹介とともに解明する。また[中村栄孝1966]には、1935年金忠善の子孫が住む慶尚北道達城郡へ赴いて史料調査を行った時の一族との記念写真、さらに唯一の金忠善の自筆書写真が収録されている。

しかしもちろん、沙也可の他にも大勢の降倭が存在する。近年、北島万次は、李舜臣『乱中日記』[北島万次2001]のなかから、様々な降倭の姿を指摘している[北島万次2002a]。たとえば降倭が何時どこから現れたのか、李舜臣(朝鮮の水軍統制使)が降倭をどのように編成し利用したのか、などの点を考察し、降倭の続出するピークが戦間期の講和交渉期(1595～96年)であったことを明らかにしている。この時期は、日本軍が慶尚道南岸に倭城を築き、長期駐屯していた時期に当たる。倭城の築城普請の作業も厳しくなり、兵糧不足も重なって倭卒(日本兵)が大勢朝鮮側に投降したとされる。また、李舜臣のもとに集められた降倭は、決して一枚岩のように団結して存在していたのではなく、個々様々な生き方をしていたことも解明されている。朝鮮側の一次史料を通じて、降倭の世界がより鮮明に見えてきたといえよう。

2、 義兵

義兵とは、朝鮮王朝の正規の軍人ではなく、朱子学の義を奉じた軍で士大夫が中心となり、一般農民も参加していた。実証史学の立場から、初めて義兵の存在を取り上げたのは〔池内宏1936a〕である。池内は、日本側と朝鮮側の双方の史料を突き合わせることによって、1592年に起きた咸鏡道の義兵決起について明らかにする。すなわち、まず咸鏡南道の咸興において、鍋島直茂の本陣を中心に義兵が襲撃を加えたこと、さらに咸鏡北道では鄭文孚を指導者とする義兵が決起し、日本軍に帰順した鞠世弼らの領する鏡城を奪取したことなどを論証している。

その後の義兵研究は、朝鮮史研究、とくに民衆史を重視する立場から深められていく。旗田巍は、「朝鮮の人間が歩んで来た朝鮮人の歴史」を研究する必要性を説き、義兵の闘いが日本軍の侵略を破綻させたとして、朝鮮民衆のエネルギーを高く評価する〔旗田巍1951〕。この議論をさらに発展させたのが、貫井正之である。〔貫井正之1963・1965〕は一貫して義兵研究を行い、その成果を〔貫井正之1996〕にまとめあげる。これにより、①日本軍の侵略を契機に、朝鮮各地で朝鮮王朝政府に対する闘争・叛乱が起きて混乱状態に陥ったこと、②義兵を束ねる諸将が総じて両班層（士族階級）出身であるのに対して、配下にいた兵士の大部分が身分解放の要求をもつ良人農民や奴婢であったこと、③ここに、純粋な民族的闘争へ昇華できなかった義兵運動の限界があったこと、などが明らかにされている。このうち②については、〔崔永禧1960〕も同様の指摘をしている。また、義兵将郭再祐をとりあげた個別事例研究として、貫井の研究の他、〔金潤坤1967〕がある。

基本的には貫井と同様の視点に立って、義兵運動を取り上げたのが、〔矢沢康祐1977a・1977b〕である。この矢沢の研究の中から貫井と異なる論点を拾うとすれば、朝鮮民衆の苦しみが、日本軍の侵略や明軍へのさまざまな奉仕による負担だけではなく、朝鮮政府から課される築城などの土木工事、武器・兵糧の運搬などの労役、貢納義務の履行などに基づくものである、とした点であろう。

義兵研究は、僧兵の統率者である惟政（松雲大師）の動向に焦点を絞った〔仲尾宏・曹永祿2002〕の刊行によって、近年再び活況を呈している。その序論を述べた〔高柄翊2002〕は、当時の小説に描かれた惟政の超人的な行動こそ、戦乱から抜け出そうとする民衆心理の反作用によるものであると指摘する。また〔北島万次2002c〕は、戦乱の周辺とその中で活動する惟政の位置づけを明確にする。〔曹国慶2002〕は、惟政と共に主戦派として戦った劉綎（明総兵）をとりあげ、両者の間に協同態勢が存在していたことを明らかにし、さらに〔鄭柄朝2002〕は、惟政の思考を仏教史の観点から掘り下げている。いずれも、新たな義兵研究の出発点をなすものといえよう。

3、 被擄人

文禄・慶長の役によって、数万人と言われる朝鮮人捕虜や俘虜（総称して「被擄人」）が連行されたといわれる。この被擄人に関する研究は、当初、戦役の結果、半島・大陸の文化がどのように日本へ伝播したかという問題関心から論じられてきた。まず〔平井鏗次郎1905〕が、朝鮮陶工の日本連行に注目し、これを契機に近世日本の陶工業が発達したことを明らかにする。ついで〔徳富

猪一郎1921～22]は、陶器や活版印刷の技術が日本に入り、それが結果的に「国民的自信力」につながったと指摘する。近年になって、薩摩苗代川の陶工たちをとりあげたのが、[北島万次2002a]である。彼らは主に第二次出兵(慶長の役)の際、島津氏によって強制連行された陶工たちで、苗代川に集住地を築かれて共同生活を余儀なくされたという。北島は、この苗代川における朝鮮式の陶磁器技術とその生産構造を明らかにしたうえで、西日本で発展した製陶技術・生産構造との相違点を解明している。

こうした文化的な側面とは異なり、内藤雋輔は朝鮮民族の間に悲惨な爪痕を残した史実を明らかにしたいという視角から、政治・軍事・外交ではなく、積極的に被擄人の実態に注目した[内藤雋輔1976]。内藤によると、被擄人には大別して、朱子学者・農民・職人(陶工など)があったとされる。このうち李退溪の門流に当たる姜沆(藤原惺窩と交流があり、近世儒学の基礎を築いたとされる)の例をひくまでもなく、朱子学者の場合は一般被擄人と区別され、日本の学者から絶大な尊敬と待遇を受けたというが、その反面、農民や陶工などの被擄人は、自身で記録を残すこともなく、ひたすら肉体労働を強いられており、同じ被擄人でも彼らを一律に論ずるべきではないと指摘している。ただし鶴園裕は、被擄人を農業労働力に宛てたという見解について、史料的に再考を要すると異論を出している[鶴園裕1991]。

被擄人は、日本へ連行された後、東北地方から沖縄、はては東南アジアやヨーロッパにまで転売された者もいる。しかしその一方、かなりの数の被擄人が、半世紀という長い期間をかけて本国朝鮮へ送還(刷還)されたことも事実である。内藤雋輔の概算によれば、近世初期に刷還された朝鮮人被擄人の数は7500人以上である[内藤雋輔1976]。しかし近年の[米谷均1999b]は、この内藤の数字について同一の被擄人と思われる者をかなり重複して計算している恐れがあると指摘し、日朝双方の記録を再検討すると、おおよそ6100人程度であったのではないかと想定する。

被擄人の送還システムについては、朝鮮通信使(近世初期の「回答使兼刷還使」)側による召募の動きから明らかにしたもの[米谷均1999a]と、そうした働きかけに対する日本側諸勢力、なかでも対馬宗氏・諸大名・幕府等の対応からみていくもの[米谷均1999b]の、両面の研究方法が考えられる。いずれの側からみても、時代とともに刷還される被擄人たちの人数は激減する。李元植の研究によると、これは被擄人たちが日本社会への定住傾向を強めていったという事情のほか、‘本土に還っても少しも得なことはない’と仲間に言いふらして刷還の妨害をするような者(たとえば被擄人の李文長など)が存在していたからだとする[李元植1984]。これと関連して、先の米谷論文は、帰国後の被擄人に対する朝鮮王朝の取り扱いに注目する[米谷均1999a・1999b]。当初、彼らに約束されていた免罪(日本側の捕虜になった「罪」を赦すこと)・免役(賦役の免除)・免賤(賤民身分からの解放)・復戸(忠臣・孝子・節女に対する免税)などの特典付与が、実際にどれほど遂行されたのか疑わしく、むしろ釜山あたりで置き去りにされた事例があることから、帰国後の被擄人個々の追跡調査が重要であると指摘する。被擄人についての研究は、彼らが日本の内外に拡散し、個別に異なる様相を呈していたことから、今日に至るまであまり解明されていない(→「朝鮮通信使(近世編)」研究史を参照)。

六、今後の研究課題

以上の研究史整理をふまえて、今後、期待される研究課題を列記しておく。

1、 朝鮮側・明側の兵糧供給システムの究明

戦争を遂行する上で、兵站・兵糧の問題は無視できない問題である。日本側の兵糧供給システムについては、蔵入地や輸送体系の研究などが多くあるが、朝鮮軍・明軍の兵糧調達支給システムは未解明の部分が多い。また先に触れたように、明軍の駐留・派兵問題を考えるうえで、また当時の米価や市場流通の問題など朝鮮社会を知る手がかりとしても、こうした兵糧調達システムの解明は不可欠の課題である。

2、 被擄人の実態と送還システムの解明

戦争時に日本に連行された被擄人が、いかにして本国へ送還(刷還)されたかという点も、個別事例研究が不足している。さらに、「投降朝鮮人」「帰順朝鮮人」と被擄人との関係、被擄人の性格の実態自体も未解明の部分が多い。被擄人送還の制度と併せて、実態を検証していく必要がある。

3、 倭城の研究

かつての倭城址研究会の活動や、最近の研究雑誌『倭城の研究』における地道な作業によって、倭城の確認自体はかなり進んできた。しかしながら、いまだ発見されていない倭城もあり、総ての検証が終了したとはいえない。韓国における都市開発は、予想を超えた速さで進められており、そのなかにあって悉皆的な調査は、緊要な研究課題といわなければならない。考古学的な発掘も含めて、倭城の研究(現地調査)を早急に進める必要がある。

4、 戦争による朝鮮社会の変化

文禄・慶長の役によって、朝鮮社会が大きな痛手を被ったことは事実だが、それでは具体的に何がどのように変化したのか。戦後社会への影響や戦前との違いはどのようなものだったのか。この点については、日本社会の変化ほど考察されていない。豊臣政権の朝鮮侵略による傷痕を客観的に理解するためにも、こうした点の実証的研究が不可欠である。

5、 豊臣政権の戦略的思考に関する研究

従来は、たとえば、戦間期講和交渉における和議7箇条をもとにして朝鮮侵略の目的や動機を論じる傾向が強い。しかしこの思考方法は、戦争後半期の史実をもって初期の状況に当てはめているに他ならない。豊臣政権内外には、様々な人間が存在し、それも時期によって思考が変化していることは否めない。秀吉個人はもとより、豊臣政権内部の「戦略論」を細部にわたって検討し、

開戦の目的・動機を鮮明にする必要がある。

6、 東アジア国際秩序、とくに「冊封体制」に関する再検討

本文で触れたように、豊臣政権以降の国家を、‘プロト国民国家’‘主権国家’と評価して、従来の東アジア国際秩序から自立する傾向にある、と見なす学説が近年有力である。しかしそうした‘独立を志向する’中近世移行期の日本社会と、明朝の主導する「冊封体制」とがどれほど抵触・矛盾するののかについては、今後も議論の余地がある。少なくとも、戦間期講和交渉に見えるように、冊封も朝貢も豊臣政権は甘受したわけであり、‘冊封関係の解消’がただちに‘自立’を意味したとはいえないからである。明代の「冊封体制」「冊封関係」の実態そのものが、いまなお漠然ととらえられており、その再検討はもちろんのこと、戦前・戦後の国際秩序のなかで何がどのように変わったのか、こうした点も明らかにしていかなければならない。

文禄・慶長の役 文献目録

No.	刊行年	著者	表題	出典
1	1893	木下真弘	『豊太閤征外新史』	青山堂
2	1894	北豊山人	『文禄慶長朝鮮役』	博聞社
3	1894	松本愛重	『豊太閤征韓秘録』	成歓社
4	1900	勝又 次郎	「明朝の方面より観察したる文禄の役」	『史学界』2-4、5、6、8、11、12
5	1904	幣原坦	「沙也可」	『歴史地理』10-1
6	1904	田中義成	「豊太閤の外征に於ける起因に就て」	『史学雑誌』15-11
7	1905	岡田正之	「文禄役に於ける我戦闘力」	[史学会 1905 収録]
8	1905	史学会編	『弘安文禄征戦偉績』	富山房
9	1905	黒板勝美	「高野山朝鮮陣の供養碑」	[史学会 1905 収録]
10	1905	芝葛盛	「文禄役に於ける占領地収税の一斑」	[史学会 1905 収録]
11	1905	鈴木圓二	「蔚山籠城情況」	[史学会 1905 収録]
12	1905a	田中義成	「豊太閤が外征の大目的を示したる文書」	[史学会 1905 収録]
13	1905b	田中義成	「豊太閤の外征に於ける原因に就て」	『史学雑誌』16-8
14	1905	辻善之助	「安国寺恵瓊の書簡の一節」	[史学会 1905 収録]
15	1905	平井鏗二郎	「文禄役の我が工芸に及ぼせる影響」	[史学会 1905 収録]
16	1905	藤田明	「豊太閤所持と伝へらるゝ扇面及び朝鮮役に用られたる地図」	[史学会 1905 収録]
17	1905	三浦周行	「豊太閤の軍律」	[史学会 1905 収録]
18	1905	三上参次	「文禄役における講和条件」	[史学会 1905 収録]
19	1905	八代国治	「文禄役における俘虜の待遇」	[史学会 1905 収録]
20	1905	山県昌蔵	「文禄役の虎狩」	[史学会 1905 収録]
21	1906	妻木忠太	「碧蹄館付近における戦役につきて」	『史学雑誌』17-8
22	1908	大川茂雄	「朝鮮梁青溪父子の伝」	『國學院雑誌』14-8
23	1908	松本愛重	「燃藜室記述の豊太閤に関する異説」1・2	『國學院雑誌』14-1、3
24	1909	大川茂雄	「征韓役晋州儒兵の忠烈」上・下	『國學院雑誌』15-10、11
25	1910	池内宏	「龍仁の戦」	『東洋時報』145
26	1910	田中義成	「倭寇と李成桂」	『歴史地理』朝鮮号
27	1911	池内宏	「カトカイと云う地名につきて」	『東洋学報』1-3
28	1912	青柳南冥	『鮮人の記せる豊太閤征韓記』	朝鮮研究会

29	1912	池内宏	「カライサンと云う地名につきて」	『東洋学報』2-1
30	1913	上村閑堂(観光)	「朝鮮僧松雲と日本僧玄蘇」	『禅宗』225、227
31	1913a	池内宏	「海汀倉の戦につきての考」	『史学雑誌』24-5
32	1913b	池内宏	「咸延虎の言に拠れる懲毖録の記事を検覈して河合博士の示教に及ぶ」	『史学雑誌』24-8
33	1913a	河合弘民	「海汀倉の戦に関する懲毖録の誤謬」	『史学雑誌』24-7
34	1913b	河合弘民	「再び懲毖録の誤謬に就て池内学士に答ふ」	『史学雑誌』24-10
35	1913~14	池内宏	「文禄戦役開始以前に於ける秀吉の対外的態度を論じて此の戦役の発端に及ぶ」	『史学雑誌』24-7、9~12、25-1、2
36	1914a	池内宏	『文禄慶長の役』正編第一	南満州鉄道(1987年吉川弘文館復刊)
37	1914b	池内宏	「京城の軍議に関する黒田家譜の記事錯簡と軍議の時日」	『史学雑誌』25-3
38	1914c	池内宏	「海汀倉の戦に関して再び河合博士に答ふ」	『史学雑誌』25-4
39	1915a	池内宏	「加藤清正のオランカイ攻伐」	『史学雑誌』26-3
40	1915b	池内宏	「永興における日本軍の徴税」	『学生』6-10
41	1915	内藤虎次郎	『慕華堂』	朝鮮研究会
42	1917	辻善之助	『海外交通史話』	内外書籍
43	1918	池内宏	「明将祖承訓の敗走以後に於ける我が軍の態度」	『史学雑誌』29-7
44	1918	魚澄惣五郎	「文禄慶長の役が我が製陶業に及ぼせる影響」	『歴史と地理』1-6
45	1918	田中義成	「文禄役の発端に就て」	『朝鮮』
46	1920	栢原昌三	「文禄講和条約に就いて」	『史学雑誌』31-5
47	1920~21	伴三千雄	「南鮮に於ける慶長・文禄の築城」1~8	『歴史地理』36-5、6、37-1、6、38-1
48	1921~22	徳富猪一郎	『近世日本国民史 朝鮮役』上・中・下	民友社
49	1922a	伴三千雄	「文禄慶長役数次の軍議」1~4	『歴史地理』40-1~4
50	1922b	伴三千雄	「文禄役に所謂「古都」の弁」	『歴史地理』40-6
51	1923	三浦周行	「朝鮮役に関する二三の考察」上・下	『芸文』14-5、6
52	1924	参謀本部	『日本戦史 朝鮮役』	偕行社
53	1924	幣原坦	『朝鮮史話』	富山房
54	1924	伴三千雄	「南鮮沿岸の築城市群—文禄慶長役史蹟の研究—」	『明治聖徳記念学会紀要』22
55	1925	田中義成	『豊臣時代史』	明治書院
56	1925a	伴三千雄	「朝鮮役に於ける兵器と戦法の変遷」	『歴史地理』増刊号
57	1925b	伴三千雄	「再び南鮮に於ける文禄・慶長の築城に就いて」	『歴史地理』46-3
58	1926	青柳綱太郎(南冥)	『朝鮮史話と史蹟』	朝鮮研究会
59	1929a	名越那珂次郎	「日本切支丹に殉教せる朝鮮の人々」	『朝鮮』165

60	1929b	名越那珂次郎	「碧蹄館役と立花宗茂」	『朝鮮』174
61	1930	青柳南冥(綱太郎)	『朝鮮史家の記せる豊太閤朝鮮役—著者の注釈と修正並批判—』(文禄の巻) (慶長の巻)	京城新聞社
62	1930	辻善之助	『増訂 海外交通史話』	内外書籍
63	1930	都甲玄卿	「文禄役釜山城の明冊封使遁走事件に就て」	『朝鮮』184
64	1930	名越那珂次郎	「碧蹄館役と小早川隆景」	『朝鮮』184
65	1930	山口正之	「日本耶蘇会宣教師セスペデスの渡鮮—朝鮮基督教史研究(1)—」	『青丘学叢』2
66	1930	予覚民	「日本の大陸侵略史」	『歴史教育』5-10
67	1931a	名越那珂次郎	「碧蹄館役と豊太閤の感状」	『青丘学叢』3
68	1931b	名越那珂次郎	「幸州山城の戦と権慄」	『朝鮮』198
69	1931	山口正之	「耶蘇会宣教師の入鮮計画—朝鮮基督教史研究(2)—」	『青丘学叢』3
70	1932	山口正之	「朝鮮役に於ける被虜人の行方—朝鮮被虜人売買の一例—」	『青丘学叢』8
71	1933	田保橋潔	「壬辰役雑考」	『青丘学叢』14
72	1933	中村栄孝	「慕華堂金忠善に関する史料に就いて」	『青丘学叢』12 [中村栄孝 1969 収録]
73	1933	成田喜英	「倭寇と万暦の役」(1)・(2)	『歴史教育』7-11、12
74	1934a	黒田省三	「所謂服部伝右衛門朝鮮陣覚書に就いて」	『青丘学叢』17
75	1934b	黒田省三	「臨海・順和二君の生擒と其送還」	『青丘学叢』18
76	1934	近藤直	「朝鮮征伐」	『歴史科学』3-5
77	1934	藤井真澄	「豊太閤と大アジア経綸」	『日本精神講座』8、新潮社
78	1935	大木透	「新資料に拠る加藤清正の海外貿易に就いて」	『伝記』2-4
79	1935	中村栄孝	「文禄慶長の役」	『岩波講座 日本歴史』
80	1935	渡辺世祐	「朝鮮役と我が造船の発達」	『史学雑誌』46-5
81	1936a	池内宏	『文禄慶長の役』別編第一	東洋文庫
82	1936b	池内宏	「東萊の安楽書院と釜山東萊二城陥落図」	『青丘学叢』26
83	1937	池宮新	「池内宏著「文禄慶長の役」」	『史学』16-2
84	1937a	中村栄孝	「文禄・慶長の役を中心とした外交事情」	『歴史教育』12-8
85	1937b	中村栄孝	「文禄役にわが軍は朝鮮で何をしたか」	『朝鮮』271
86	1938	中村栄孝	「慶長役の意義」	『史学雑誌』49-7
87	1938	丸亀金作	「朝鮮宣祖朝に於ける明丁応泰の誣奏事件」1・2	『歴史学研究』8-9、10
88	1938	山口正之	「文禄役中朝鮮陣より発せし耶蘇会士セスペデスの書翰につきて」	『史学雑誌』49-1
89	1939	中村栄孝	「文禄慶長の役」(大日本戦史3)	三教書院
90	1939	野村晋城	「朝鮮の役と北九州に於ける都市の発達」	『社会経済史学』9-3

91	1940	京口元吉	『秀吉の朝鮮経略』	白揚社
92	1941	古田良一	「秋田家文書による文禄・慶長初期北国海運の研究」	『社会経済史学』11-3
93	1941	穂積文雄	「明史日本伝に見ゆる秀吉」	『支那』32-9
94	1942	有馬成甫	『朝鮮役水軍史』	空と海社
95	1942	丸亀金作	「文禄・慶長の役と南方人種の海鬼について」	『歴史学研究』103
96	1942	和田博	「支那側より見たる豊太閤封王の事情」	『東亜史論叢』生活社
97	1943	新城常三	『戦国時代の交通』	畝傍書房
98	1944	平岡武夫	「秀吉と明史」	『学芸』1-3
99	1946	京口元吉	「豊臣秀吉の朝鮮経略」	『新中国』5
100	1950	石原道博	「丁酉役後の日明交渉について」	『史学雑誌』59-5
101	1951	石原道博	「倭寇と壬辰の役」	『朝鮮学会会報』6
102	1951	旗田巍	『朝鮮史』	岩波書店
103	1952	池内宏	「文禄役における小早川隆景の全羅道経略」	『東洋学報』35-2
104	1952	池宮新	「豊臣秀吉の対外政策について」	『法学研究』25-11
105	1952	鈴木良一	「秀吉の『朝鮮征伐』」	『歴史学研究』155
106	1953	石原道博	「朝鮮側よりみた明末の日本乞師について」	『朝鮮学報』4
107	1953	中村栄孝	「朝鮮全州の史庫とその蔵書—壬辰・丁酉の乱と典籍の保存—」	『名古屋大学文学部研究論集』5
108	1953	丸茂武重	「文禄、慶長の役に於ける朝鮮人抑留に関する資料」	『国史学』61
109	1953	矢沢利彦	「リッチ(利馬竇)史料に見えた日本関係記事」	『史学雑誌』62-12
110	1954	奥野高広	「文禄慶長の役と豊臣秀吉」	『日本歴史』79
111	1954	鈴木良一	『豊臣秀吉』	岩波書店
112	1954	矢沢利彦	「マテオ＝リッチと文禄慶長の役」	『日本歴史』70
113	1959	河合正治	『安国寺恵瓊』(人物叢書)	吉川弘文館
114	1960	崔永禧	「壬辰義兵の性格」	『史学研究』8
115	1959	中村栄孝	「文禄・慶長の役に関する覚書」	『名古屋大学文学部10周年記念論集』
116	1960	中村栄孝	「朝鮮役の出征将士と朝鮮女性」	『日本歴史』150
117	1961	田中健夫	『島井宗室』(人物叢書)	吉川弘文館
118	1961	那波利貞	「月峯海上録攷釈」	『朝鮮学報』21・22
119	1961	駒井義明	「日輪伝説の伝統について」	『神道史研究』9-4
120	1962	石原道博	「万暦朝鮮役後の日明交渉」	『茨城大学文理学部紀要』13
121	1962	岩沢愿彦	「秀吉の唐入りに関する文書」	『日本歴史』163
122	1962	佐々木潤之介	「軍役論の問題点(上)」	『歴史評論』146

123	1962	那波利貞	「慶長丁酉役の水軍俘虜鄭希得の月峯海上録」	金正桂編『韓来文化の後栄』上(韓国資料研究所)
124	1962a	中村栄孝	「月峯海上録について」	『朝鮮学報』25
125	1962b	中村栄孝	「『月峯海上録』と『老松堂日本行録』」	『日本歴史』173
126	1962c	中村栄孝	「壬辰戦争の義兵について」	『朝鮮学報』23
127	1963	阿部吉雄	『日本朱子学と朝鮮』	東京大学出版会
128	1963	岡本良知	『豊臣秀吉』(中公新書)	中央公論社
129	1963	長正統	「景轍玄蘇について——外交僧の出自と法系——」	『朝鮮学報』29
130	1963	中村栄孝	「文禄・慶長役素描」	『歴史教育』11-10
131	1963	貫井正之	「『壬辰倭乱』の初期における朝鮮人民の動向について」	『朝鮮研究月報』23
132	1964	朝尾直弘	「豊臣政権の基盤」	『歴史学研究』292
133	1964	石原道博	『文禄慶長の役』	塙書房
134	1964	三品彰英	「明王贈豊太閤冊封文」	『日本美術工芸』307
135	1965	阿部吉雄	『日本朱子学と朝鮮』	東京大学出版会
136	1965	佐々木潤之介	「幕藩制国家の成立」	北島正元編『体系日本史叢書2 政治史Ⅱ』山川出版社
137	1965	内藤雋輔	「秀吉の朝鮮役に従軍した一日本僧『慶念』の戦争観について」	『ノートルダム清心女子大学英文学科・一般教養)紀要』1-1
138	1965	中村栄孝	「朝鮮役の投降倭将金忠善—その文集と伝記の成立—」	『名古屋大学文学部研究論集』38
139	1965a	貫井正之	「『文禄・慶長の役』研究史における義兵の位置と義兵鄭仁弘軍について」	『桃山歴史・地理』5 [貫井正之 1996 収録]
140	1965b	貫井正之	「豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争における朝鮮人民の動向について—特に朝鮮の義兵を中心として—」	『朝鮮史研究会論文集』1 [貫井正之 1996 収録]
141	1966	石原道博	「壬辰・丁酉倭乱と戚継光の新法」	『朝鮮学報』37・38
142	1966	高橋盛孝	「壬辰倭乱の伝説」	『朝鮮学報』37・38
143	1966	内藤雋輔	「壬辰・丁酉役における謂ゆる『降倭』について」	『朝鮮学報』37・38
144	1966	内藤雋輔	「『朝鮮日々記』追考并に正誤」	『朝鮮学報』41
145	1966	藤間生大	『東アジア世界の形成』	春秋社
146	1966	李進熙	「秀吉の朝鮮侵略について」	『歴史地理教育』125
147	1966	黒田省三	「中村栄孝『日鮮関係史の研究』上」	『朝鮮学報』41
148	1966	田中健夫	「朝鮮の役の分析視角について」	『九州史学』33・34
149	1966	中村質	「朝鮮の役と九州」	『九州史学』33・34
150	1966	中村栄孝	『日本と朝鮮』(日本歴史新書)	至文堂
151	1966	三鬼清一郎	「朝鮮役における軍役体系について」	『史学雑誌』75-2
152	1966	森山恒雄	「九州における豊臣氏直轄領の一形態」	『東海史学』2
153	1967	長節子	「朝鮮役における明福建軍門の島津氏工作」	『朝鮮学報』42 [長節子 2002 収録]

154	1967	金潤坤	「郭再祐の義兵活動」	『歴史学報』33
155	1967	内藤雋輔	「文禄・慶長役における被虜朝鮮人の遺聞について」(上)	『朝鮮学報』44
156	1967	中村栄孝	「今西文庫本『乱中秘記』写本について—18世紀朝鮮の首都防衛論」	『ビブリア』(天理図書館)35
157	1968	三鬼清一郎	「朝鮮役における水軍編成について」	『名古屋大学文学部二十周年記念論集』
158	1968	内藤雋輔	「文禄・慶長役における被虜朝鮮人遺聞—宗教家の場合」	『朝鮮学報』49
159	1968	中村栄孝	「明太祖家法に見える侵略戦争抑制の規定—『祖訓録』と『皇明祖訓』の対外関係条文—」	『朝鮮学報』48
160	1969	朝尾直弘	「近世封建制論をめぐって」	『日本の歴史』別巻、読売新聞社
161	1969a	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』中	吉川弘文館
162	1969b	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』下	吉川弘文館
163	1970	朝尾直弘	「鎖国制の成立」	『講座日本史』4、東京大学出版会
164	1970	長節子	「錦溪日記」小紹介	『朝鮮学報』56
165	1970	黒田省三	「中村栄孝『日鮮関係史の研究』中・下」	『朝鮮学報』57
166	1970	佐々木潤之介	「統一政権の歴史的な前提」	『歴史評論』241
167	1970	中村栄孝	解説:「今西文庫本『乱中秘記』写本について」	『朝鮮学報』55
168	1971	大庭 脩	「豊臣秀吉を日本国王に封ずる詔命について—わが国に現存する明代の詔勅—」	『関西大学・東西学術研究所紀要』4号
169	1971a	中村栄孝	『朝鮮—風土・民族・伝統一』	吉川弘文館
170	1971b	中村栄孝	「豊臣秀吉の対外出兵について—その戦域に関する序説」	『日本歴史』272
171	1971	三鬼清一郎	「田麦年貢三分一徴収と荒田対策」	『名古屋大学文学部研究論集』史学18
172	1971	渡辺悌之助	「朝鮮役における籠城考—吉州および蔚山—」	『軍事史学』6-4
173	1972	今井林太郎(解説)	『兵庫県の歴史』8号巻頭グラビア(三原郡西淡町松帆江尻江善寺石碑拓本)	兵庫県
174	1972	中村栄孝	「万曆朝鮮の役と浙江将兵」	『東方学会創立25周年記念東方学論集』東方学会
175	1972	松本豊寿	「城下の大基地の町 肥前名護屋」	『地理学評論』45-3
176	1972	三鬼清一郎	「豊臣政権の市場構造」	『名古屋大学文学部研究論集』史学19
177	1972	森山恒雄	「九州における豊臣御蔵入米(地)について—肥後の代官加藤清正を中心に—」	『熊本史学』40
178	1972	李鉉淙	「備辺司創置年代考」	『朝鮮研究年報』15
179	1973	北島万次	「田尻鑑種の「高麗日記」」	『歴史評論』279
180	1973	崔書勉	「七年戦役の被虜—おたあ・ジュリアについて」	『韓』2-5
181	1973	佐々克明	「朝鮮の役と九鬼水軍—九鬼水軍興亡史(2)」	『歴史と人物』3-1
182	1973	中村栄孝	「朝鮮における関羽の祠廟について—壬辰・丁酉倭乱と「関王廟」の創始」	『天理大学学報』24-5
183	1973	中村栄孝	「豊臣秀吉の日本国王冊封に関する詔命、勅諭と金印について」	『日本歴史』300

184	1973	森山恒雄	「九州の豊臣蔵入地の構造と機能(Ⅰ)—各国別蔵入地の検出作業と旧論の補足をかねて—」	『熊本大学教育学部紀要』22
185	1973	矢作勝美	「朝鮮活字の渡来と定着」	『日本の中の朝鮮文化』19
186	1974	内藤雋輔	「慶長丁酉の役, 被虜学人間の雅游について」	『朝鮮学報』71
187	1974	中村栄孝	「壬辰倭乱の発端と日本の「仮道入明」交渉」	『朝鮮学報』70
188	1974	藤木久志	「朝鮮出兵と民衆」	佐々木潤之介編『日本民衆の歴史』3、三省堂
189	1974	松田毅一・川崎桃太	『秀吉と文禄の役』(中公新書)	中央公論社
190	1974	三鬼清一郎	「朝鮮役における国際条件について」	『名古屋大学文学部研究論集』史学 21
191	1974	山口啓二	『幕藩制成立史の研究』	校倉書房
192	1975	北島万次	「秀吉の朝鮮侵略挫折と義兵運動展開の基盤」	『歴史評論』300
193	1975	李鉉淙	「壬辰倭乱と東南アジア人の来援」	『アジア公論』29
194	1975	紙屋敦之	「梅北一揆の歴史的意義」	『日本史研究』157
195	1975	北島万次	「秀吉の朝鮮侵略挫折と義兵運動展開の基盤」	『歴史評論』300
196	1975	中村栄孝	「蓬左文庫の『朝鮮征伐記』古写本」について	名古屋大学文学部国史学研究室編『名古屋大学日本史論集』下、吉川弘文館
197	1975	藤木久志	『織田・豊臣政権』(日本の歴史 15)	小学館
198	1975a	三鬼清一郎	「太閤検地と朝鮮出兵」	『岩波講座 日本歴史』9、岩波書店
199	1975b	三鬼清一郎	「人掃令をめぐる」	名古屋大学文学部国史学研究室編『名古屋大学日本史論集』下、吉川弘文館
200	1976	李元植	「壬乱僧将松雲大師墨跡の発見に寄せて—加藤清正陣営への往返を中心に—」	『韓』5-5、6
201	1976	内藤雋輔	『文禄・慶長の役における被虜人の研究』	東京大学出版会
202	1976	中村新太郎	『日本と朝鮮の二千年』	東邦出版社
203	1976	中村栄孝	「秀吉の朝鮮出兵の意図はどこに求められるか」	箭内健次編『海外交渉史の視点』2、日本書籍
204	1976	奈倉哲三	「秀吉の朝鮮侵略と『神国』」	『歴史評論』314
205	1976	三鬼清一郎	「文禄・慶長の役と瀬戸内の海賊」	『歴史手帖』4-5
206	1977	李焯錫	『壬辰戦乱史』	東洋図書出版
207	1977	岡野昌子	「秀吉の朝鮮侵略と中国」	『中山八郎教授頌寿記念 明清史論叢』
208	1977a	北島万次	「秀吉の朝鮮侵略と幕藩制国家の成立」	『歴史学研究』1977年度別冊
209	1977b	北島万次	「豊臣政権の軍役体系と島津氏」	北島正元編『幕藩制国家成立過程の研究』、吉川弘文館
210	1977c	北島万次	「書評: 内藤雋輔著『文禄慶長の役における被虜人の研究』」	『歴史評論』327
211	1977	姜在彦	「姜沆と江戸儒学—『看羊録』にみる藤原惺窩との交友」	『季刊三千里』9
212	1977	金泰俊	「壬辰の乱と朝鮮文化の東漸」	『アジア公論』6-11
213	1977a	貫井正之	「郭再祐—抵抗とその生涯—」	『朝鮮学報』83

214	1977b	貫井正之	「全羅道義兵について」	『朝鮮歴史論集』
215	1977a	矢沢康祐	「『壬辰倭乱』と朝鮮民衆のたたかい」	『人文学報』118
216	1977b	矢沢康祐	「『壬辰倭乱』と朝鮮」	『歴史学研究』1977年度別冊
217	1978	琴秉洞	『耳塚—秀吉の鼻斬り・耳斬りをめぐって—』	二月社
218	1978	北島万次	「豊臣政権の軍役体制と島津氏」	北島正元編『幕藩制国家成立過程の研究』、吉川弘文館
219	1978	北村秀人	「書評:内藤雋輔著『文禄慶長の役における被虜人の研究』」	『東洋史研究』36-4
220	1978	琴秉洞	「壬辰倭乱の実相—ついで秀吉の妄想—」	『統一評論』159
221	1978	崔書勉	「75年ぶりに確認された咸鏡道壬辰義兵大捷碑」	『韓』7-3
222	1978	貫井正之	「義兵将・郭再祐—壬辰義兵の評価をめぐって—」	『季刊三千里』13
223	1978	吉留路樹	『豊臣秀吉の爪痕』	二月社
224	1979	貫井正之	「全羅道義兵について」	『旗田魏先生古稀記念 朝鮮歴史論集 上』(龍溪書舎)
225	1979	貫井正之	「壬辰・丁酉戦争と『瑣尾録』」	『季刊三千里』20
226	1979	貫井正之	「『壬辰倭乱』における義兵活動と民衆抵抗」	『朝鮮史研究会論文集』16
227	1979	朴鍾鳴訳註	『懲毖録』	平凡社(東洋文庫)
228	1979	三鬼清一郎	「朝鮮役における兵糧米調達について」	『名古屋大学文学部三十周年記念論集』
229	1979	倭城址研究会(編)	『倭城—文禄慶長役における日本軍築城遺跡1—』	倭城址研究会
230	1980	蘇在英	「壬辰・丙子両乱を中心とした文学意識の変遷過程」	『朝鮮学報』94
231	1980	貫井正之	「文禄役における安国寺軍の全羅道侵入路について—池内博士の所論と関連して—」	『桃山歴史・地理』16・17
232	1980	倭城址研究会	「倭城址調査の記録—秀吉朝鮮侵略期の朝鮮での日本式築城について—」	『歴史評論』360
233	1981a	北島万次	「醍醐の花見にみる豊臣政権の本性」	『歴史評論』369
234	1981b	北島万次	「第一次朝鮮侵略における朝鮮の占領政策」	『歴史評論』373
235	1981c	北島万次	「豊臣政権論」	『講座日本近世史』1、有斐閣
236	1981	北山学	「文禄の役に征軍の鳥飼下組の兵衛について」	『淡路の文化』3-4
237	1981	琴秉洞	「朝鮮側から見た秀吉の侵略」	『歴史地理教育』317
238	1981	杉浦敏	「対馬島民と秀吉の朝鮮侵略」	『歴史地理教育』317
239	1981a	三鬼清一郎	「織田政権の権力構造」	『講座日本近世史』1、有斐閣
240	1981b	三鬼清一郎	「江戸時代における朝鮮役の評価について」	『歴史評論』373
241	1981	山本博文	「文禄の役における講和勅使の舟の調達をめぐる小西行長と島津忠恒」	『海軍史研究』36
242	1982	北島万次	『朝鮮日々記・高麗日記—秀吉の朝鮮侵略とその歴史的告発—』	そしえて
243	1982	柳田利夫	「文禄・慶長の役とキリシタン宣教師」	『史学』52-1
244	1982	山本博文	「書評:北島万次著『朝鮮日々記・高麗日記—秀吉の朝鮮侵略とその歴史的告発—』」	『歴史評論』391

245	1983	高野信治	「佐野藩における近世家臣団の創出過程」	『九州史学』76
246	1983	森山恒雄	『豊臣氏九州蔵入地の研究』	吉川弘文館
247	1983	山本博文	「豊臣政権期島津氏の蔵入地と軍役体制」	『史学雑誌』92-6
248	1983	藤木久志	「書評:北島万次著『朝鮮日々記・高麗日記』」	『史学雑誌』92-4
249	1983	吉岡新一	「文禄・慶長の役における火器についての研究」	『朝鮮学報』108
250	1984	李元植	「朝鮮通信使に随行した倭学訳官について」	『朝鮮学報』111
251	1984	李進熙	『倭館・倭城を歩く』	六興出版
252	1984	桜井克巳	「織豊政権の朝鮮出兵における兵糧米調達政策とその実態」	『一橋研究』9-3
253	1984	西本誠司	「朝鮮出兵に関する一史料の年次について」	『鹿児島中世史研究会報』42
254	1984	布引敏雄	「『陰徳記』の日朝会話集について一文禄・慶長の役における日本軍の暴虐一」	『山口県地方史研究』51
255	1984	朴鐘鳴	『看羊録—朝鮮儒者の日本抑留記—』	平凡社(東洋文庫)
256	1985	上原兼吉	「幕藩制国家の成立と東アジア世界」	
257	1985	小和田哲男	『豊臣秀吉』(中公新書)	中央公論社
258	1985	片野次雄	「李舜臣の海—一文禄・慶長の海戦秘話—」	『月刊韓国文化』7-4
259	1985	佐々木潤之介	「東アジア世界と幕藩制」	『講座日本歴史5 近世1』東京大学出版会
260	1985	高木昭作	「『惣無事』令について」	『歴史学研究』547
261	1985	田中健夫	「文禄慶長の役と日朝貿易の関係」	『白山史学』21
262	1985	鄭樑生	『明・日関係史の研究』	雄山閣出版
263	1985	貫井正之	「豊臣秀吉と朝鮮」	『月刊韓国文化』7-9
264	1985	藤木久志	『豊臣平和令と戦国社会』	東京大学出版会
265	1985	松浦章	「明代海商と秀吉『入寇大明』の情報」	『末永先生米寿記念論集』坤の巻、同記念会
266	1986	李元淳	「壬辰・丁酉倭乱時の朝鮮人俘虜・奴隸問題」	『アジア公論』15-19
267	1986	北島万次	「豊臣政権の対外認識」	永原慶二・稲垣泰彦・山口啓二編『中世・近世の国家と社会』東京大学出版会
268	1986	グレゴリオ・セスペデス	「スペイン神父・セスペデスの倭軍従事記—小西行長と釜山からソウルまで」	『アジア公論』15-7
269	1986a	三鬼清一郎	「方広寺大仏殿の造営に関する一考察」	永原慶二・稲垣泰彦・山口啓二編『中世・近世の国家と社会』東京大学出版会
270	1986b	三鬼清一郎	「秀吉の国家構想と朝鮮出兵」	大石慎三郎編『海外視点 日本の歴史』8、ぎょうせい
271	1987	荒野泰典	「日本型華夷秩序の形成」	『日本の社会史1 列島内外の交通と国家』岩波書店
272	1987	管寧	「秀吉の朝鮮侵略と許儀後」	『日本史研究』298
273	1987	北島万次	「豊臣政権の第二次朝鮮侵略と大名領国の対応」	田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館
274	1987	豊見山和行	「琉球王国形成期の身分制について—冊封関係との関連を中心に—」	『年報中世史研究』12 [豊見山 2004 収録]

275	1987	中西豪	「朝鮮側史料に見る倭城—その観察と理解の実相」	『朝鮮学報』125
276	1987	三鬼清一郎	「関白外交体制の特質をめぐって」	田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館
277	1988	朝尾直弘	『天下統一』(体系日本の歴史8)	小学館
278	1988	宇田川武久	「壬辰・丁酉の倭乱と李朝の兵器」	『国立歴史民俗博物館報告』17 [宇田川武久 1993 収録]
279	1988	曾根勇二	「第1次朝鮮侵略における城米奉行について—その設置時期」	『紀要(文学)』(東洋大・院)24
280	1988	田中健夫	「対馬以酊庵の研究—近世対朝鮮外交機関の一考察—」	『東洋大学大学院文学研究科紀要』24
281	1988	中川和明	「豊臣政権の城普請・城作事について」	『弘前大学・国史研究』85
282	1989	張玉祥	『織豊政権と東アジア』	六興出版
283	1989	北島万次	「豊臣政権の朝鮮侵略と五山僧」	深谷克巳・加藤榮一・北島万次編『幕藩制国家と異域・異国』校倉書房
284	1989	北島万次	「中世の日朝関係」	『日朝関係史を考える』青木書店
285	1989	国重頭子	「豊臣政権の情報伝達について—文禄2年初頭の前線後退をめぐって—」	『九州史学』96
286	1990	勝俣鎮夫	「人掃令について」	『東京大学教養学部・歴史と文化』17
287	1990	北島万次	『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』	校倉書房
288	1990	池明観	「壬辰倭乱と近代朝鮮のナショナリズム」	『社会科学討究』24-2
289	1990	東京美術編	「朝鮮人道見取絵図1—鳥居本・彦根2—八幡町・仁保十王町」	東京美術
290	1990a	中野均	「朝鮮侵略戦争における海上輸送の展開について」	九州大学国史学研究室編『近世近代史論集』吉川弘文館
291	1990b	中野均	「朝鮮侵略戦争における豊臣政権の兵糧補給について」	『九州大学九州文化史研究所・紀要』35
292	1990	増田勝機	「内之浦来航の唐船(明船)について」	『鹿児島女子短大紀要』45
293	1991	片倉穰	「東南アジア渡航朝鮮人に関する覚書」	鶴園裕 1991 所収
294	1991	辛基秀・村山恒夫	『儒者姜沆と日本—儒教を日本に伝えた朝鮮人』	明石書店
295	1991	鶴園裕	『日本近世初期における渡来朝鮮人の研究』	金沢大学
296	1991	増田勝機	「いわゆる薩摩と明福建軍門との合力計画」	『鹿児島女子短大紀要』47
297	1992	紙屋敦之	「梅北一揆の伝承と性格」	『史観』126
298	1992	佐島頭子	「秀吉の『唐入り』構想の挫折と小西行長の講和交渉」	『福岡女学院大学・紀要』2
299	1992	曾根勇二	「豊臣蔵入地支配の形成について」	『東洋大学文学部・紀要』史学 45
300	1992a	北島万次	「壬辰倭乱期の朝鮮と明」	荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史Ⅱ 外交と戦争』東京大学出版会
301	1992b	北島万次	「壬辰倭乱の義兵顕彰碑と日本帝国主義」	『歴史学研究』639
302	1992	中野等	「太閤・関白並立期の豊臣政権について」	『歴史評論』507 [中野等 1999 収録]
303	1992	中村賢	「壬辰丁酉倭乱の被虜人の軌跡—長崎在住者の場合—」	『韓国史論』22
304	1992	高橋公明	「異民族の人身売買—ヒトの流通—」	荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史Ⅲ 海上の道』東京大学出版会

305	1992	貫井正之	『秀吉と戦った朝鮮武将』	六興出版
306	1992	三鬼清一郎	「陣立書の成立をめぐって」	『名古屋大学文学部研究論集』史学 38
307	1992	山室恭子	『黄金太閤』(中公新書)	中央公論社
308	1993	宇田川武久	『東アジア兵器交流史の研究—15～17世紀における兵器の受容と伝播—』	吉川弘文館
309	1993	金文子	「豊臣政権期の日・明和議交渉と朝鮮」	『お茶の水史学』37
310	1993	佐島顕子	「虚実錯綜した講和交渉」	『歴史群像シリーズ35 文禄・慶長の役』、学研
311	1993	清水紘一	「博多基地化構想と禁教令—天正禁教令との関連を中心として—」	藤野保先生還暦記念会編『近世日本の政治と外交』、雄山閣出版 〔清水紘一 2001 収録〕
312	1994	李元淳	『韓国から見た日本の歴史教育』	青木書店
313	1994	姜在彦	『韓国と日本の交流史 近世篇』	明石書店
314	1994	佐島顕子	「壬辰倭乱講和の破綻をめぐって」	『年報朝鮮学』4
315	1994	崔官	『文禄・慶長の役』	講談社
316	1994	中野等	「文禄・慶長期の豊臣政権」	『歴史評論』534 〔中野等 1999 収録〕
317	1995a	李啓煌	「慶長の役の最末期における『丁応泰誣奏事件』と日・明将らの講和交渉」	『日本史研究』389
318	1995b	李啓煌	「和好交渉における朝・日の立場・態度」	朝尾直弘教授退官記念会編『日本国家の史的特質』思文閣出版
319	1995	李進熙・姜在彦	『日朝交流史』	有斐閣
320	1995	池享	「東アジア社会の変動と統一政権の確立」	『歴史評論』539
321	1996	勝俣鎮夫	『戦国時代論』	岩波書店
322	1995	北島万次	『豊臣秀吉の朝鮮侵略』	吉川弘文館
323	1995	田代和生・米谷均	「宗家旧蔵『函書』と木印」	『朝鮮学報』156
324	1995a	藤木久志	『戦国史をみる目』	校倉書房
325	1995b	藤木久志	『雑兵たちの戦場』	朝日新聞社
326	1996	井原今朝男	「韓国の倭城を訪ねて」	『歴史地理教育』550 〔井原今朝男 1999a 収録〕
327	1996	仲尾宏	「壬辰・丁酉倭乱の朝鮮人被虜とその定住・帰国」	『(京都芸術短期大学紀要)瓜生』19号 〔仲尾 2000 収録〕
328	1996	中野等	「『唐入り』と『人掃』令」	曾根勇二・木村直也編『新しい近世史2 国家と対外関係』新人物往來社 〔中野等 1999 収録〕
329	1996	貫井正之	『豊臣政権の海外侵略と朝鮮義兵研究』	青木書店
330	1996	三木聡	「福建巡撫許孚遠の謀略—豊臣秀吉の『証明』をめぐって—」	『(高知大学人文学部人文学科)人文科学研究』4
331	1996	米谷均	「書評:北島万次著『豊臣秀吉の朝鮮侵略』」	『民衆史研究』52
332	1997	跡部信	「関白秀次の朝鮮出兵—大阪城天守閣所蔵史料の紹介を通して—」	『倭城の研究』1
333	1997	李啓煌	『文禄・慶長の役と東アジア』	臨川書店
334	1997a	井原今朝男	「上杉景勝の朝鮮出兵と熊川倭城」	『長野県立歴史館・研究紀要』3

335	1997b	井原今朝男	「戸隠神社再興と上杉朝鮮出兵」	『信濃毎日新聞』2月11日文化欄〔井原今朝男 1999a 収録〕
336	1997	角田誠	「文禄・慶長の役における港湾防禦の一形態—巨済島長木浦の場合について—」	『倭城の研究』1
337	1997	北垣聡一郎	「平面プランからみた機張倭城とその石積技術」	『倭城の研究』1
338	1997	金光哲	「耳塚と阿弥陀ヶ峰」	『鷹陵史学』23
339	1997a	黒田慶一	「倭城と巨済島」	『倭城の研究』1
340	1997b	黒田慶一	「倭城の滴水瓦について」	『倭城の研究』1
341	1997	黒田慶一・山崎敏昭	「巨済島4倭城の瓦」	『倭城の研究』1
342	1997	佐島颯子	『日明講和交渉における朝鮮撤退問題 一冊封正使の脱出をめぐる—』	『鎖国と国際関係』吉川弘文館
343	1997a	高田徹	「巨済島4倭城の縄張り」	『倭城の研究』1
344	1997b	高田徹	「巨済島4倭城の縄張りについて」	『倭城の研究』1
345	1997	多田暢久	「旧永邑城内の日本式石垣」	『倭城の研究』1
346	1997	田中克行	「亀井琉球守再考」	『古文書研究』46
347	1997	中野等	「肥前波多氏の領国と大陸進攻基地名護屋」	『鎖国と国際関係』吉川弘文館
348	1997	羅東旭	「巨済島の環境概観」	『倭城の研究』1
349	1997	福島克彦	「戦前の倭城研究について」	『倭城の研究』1
350	1997a	山崎敏昭	「軍威台の城郭遺構」	『倭城の研究』1
351	1997b	山崎敏昭	「巨済島4倭城の瓦について」	『倭城の研究』1
352	1997	米谷均	「16世紀日朝関係における偽使派遣の構造と実態」	『歴史学研究』697
353	1998	跡部信	『『宇都宮高麗帰陣軍物語』(翻刻)』	『倭城の研究』2
354	1998	笠谷和比古	「蔚山籠城戦と関ヶ原合戦」	『倭城の研究』2
355	1998	河上繁樹	「豊臣秀吉の日本国王冊封に関する冠服について—妙法院伝来の明代官服」	『(京都国立博物館)学叢』20号
356	1998	岸本美緒・宮島博史	『明清と李朝の時代』(世界の歴史 12)	中央公論社
357	1998	木島孝之	「倭城と国内城郭の縄張り構造からみた近世初頭大名権力の様相」	『倭城の研究』2
358	1998	金洪圭編	『秀吉・耳塚・四百年』	雄山閣出版
359	1998	金属文化研究会ほか	「順天倭城出土羽釜の金属学的調査報告」	『倭城の研究』2
360	1998a	黒田慶一	「順天城と『征倭紀功図巻』」	『倭城の研究』2
361	1998b	黒田慶一	「順天城の表採遺物」	『倭城の研究』2
362	1998	佐伯弘次	「椎葉地方と朝鮮通信使」	『文明のクロスワード Museum Kyushu』60
363	1998	仲尾宏	「鼻塚から耳塚へ—秀吉の朝鮮侵略と近代の秀吉顕彰—」	『民族文化教育研究』1号〔仲尾 2000 収録〕
364	1998a	高田徹	「順天城の縄張りについて」	『倭城の研究』2
365	1998b	高田徹	「倭城の天守について」	『倭城の研究』2

366	1998c	高田徹	「危機に立つ倭城②—梁山城の縄張り」	『倭城の研究』2
367	1998	高田徹・福島克彦	「順天城の縄張り」	『倭城の研究』2
368	1998	服部英雄	「倭城の保存をめぐる近況」	『日本歴史』606号
369	1998	福岡市博物館(編)	『黒田家文書 第1巻』	福岡市博物館
370	1998a	堀口健式	「順天城の石垣」	『倭城の研究』2
371	1998b	堀口健式	「順天城石垣の編年的位置付け」	『倭城の研究』2
372	1998	松木哲	「狭山池堤出土の船材」	『倭城の研究』2
373	1998	村井早苗	「朝鮮生まれのキリシタン市兵衛の生涯」	今谷明・高埜利彦編『中近世の宗教と国家』岩田書院
374	1998	山崎敏昭	「危機に立つ倭城①—加徳城と安骨浦の縄張り」	『倭城の研究』2
375	1998	米谷均	「中世後期、日本人朝鮮渡海僧の記録類について」	『青丘学術論集』12
376	1999	伊藤幸司	「中世後期の臨濟宗幻住派と対外交流」	『史学雑誌』108-4 [伊藤 2002 収録]
377	1999a	井原今朝男	『中世のいくさ・祭り・外国との交わり』	校倉書房
378	1999b	井原今朝男	「戦国織豊期の乙名衆と海運・鉱山・地方経営」	[井原今朝男 1999a 収録新稿]
379	1999	太田秀春	「文禄の役(壬辰倭乱)における漢城の日本軍陣所について—宇喜多秀家本陣における天守造営を中心に—」	『倭城の研究』3
380	1999	北島万次	「李朝の焼きものと薩摩の焼きもの」	『歴史評論』592
381	1999	木部和昭	「萩藩における朝鮮人捕虜と武士社会」	『歴史評論』593
382	1999	金光哲	『中近世における朝鮮観の創出』	校倉書房
383	1999	金泰虎	「16世紀末の東アジアにおける国際関係とイエズス会」	『大阪商業大学比較地域研究所・地域と社会』2
384	1999	白峰旬	「文禄・慶長の役における秀吉朱印状(城郭関係分)について」	『倭城の研究』3
385	1999a	高田徹ほか	「金海竹島倭城の遺構と遺物」	『倭城の研究』3
386	1999b	高田徹ほか	「西生浦倭城の遺構と遺物」	『倭城の研究』3
387	1999	羅東旭	「釜山市域新発見の倭城遺構」	『倭城の研究』3
388	1999	中條健太	「秀吉の朝鮮侵略における兵糧米調達について」	『ヒストリア』165
389	1999	中野等	『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』	校倉書房
390	1999	橋本雄	「史料紹介:丹波国氷上郡佐治荘高源寺所蔵文書」	『東京大学日本史学研究室紀要』3
391	1999	福島克彦	「『都市』を指向した倭城」	『倭城の研究』3
392	1999	藤本正行	「倭城の武具と戦い」	『倭城の研究』3
393	1999	堀苑孝志	「肥前名護屋城跡素描」	『倭城の研究』3
394	1999	宮武正登	「肥前名護屋城に見る豊臣秀吉の築城観」	『城郭研究室年報』8
395	1999	村井章介	「壬辰倭乱の歴史的前提」	『歴史評論』592
396	1999	村上恒夫	『姜沆 儒教を伝えた虜囚の足跡』	明石書店

397	1999a	米谷均	『朝鮮通信使』と被虜人刷還活動について	『対馬宗家文書 第I期 朝鮮通信使記録 別冊 中』ゆまに書房
398	1999b	米谷均	「近世日朝関係における戦争捕虜の送還」	『歴史評論』592
399	2000a	太田秀春	「ソウル大学校所蔵の倭城図について—『朝鮮城址実測図』の意義と同図に見る倭城—」	『倭城の研究』4
400	2000b	太田秀春	「韓国における倭城研究の現状と課題」	『倭城の研究』4
401	2000	小澤晃子	「安骨浦倭城表採陶磁器」	『倭城の研究』4
402	2000	笠谷和比古・黒田慶一	『秀吉の野望と誤算—文禄・慶長の役と関ヶ原合戦—』	文英堂
403	2000	角田誠	「南海倭城についてのフラクタル解析の試み」	『倭城の研究』4
404	2000	姜在彦	「倭城と『壬辰倭乱』」	『倭城の研究』4
405	2000	黒田慶一	「南海倭城と『征倭紀功図巻』」	『倭城の研究』4
406	2000	白峰旬	「文禄・慶長の役における豊臣政権の諸城普請について」	三鬼清一郎編『織豊期の政治構造』吉川弘文館
407	2000	千田嘉博	『織豊系城郭の形成』	東京大学出版会
408	2000	高瀬哲郎	「倭城跡を訪ねて(2)」	『研究紀要』(佐賀県立名誤屋城博物館)6
409	2000a	高田徹	「南海倭城の縄張り」	『倭城の研究』4
410	2000b	高田徹	「東三洞倭城について」	『倭城の研究』4
411	2000	高田徹・堀口健式	「釜山倭城の縄張りについて」	『倭城の研究』4
412	2000	高橋修	「壬辰倭乱に関する絵画—和歌山県立博物館蔵『壬辰倭乱図屏風』を中心に—」	『倭城の研究』4
413	2000	朝鮮日々記研究会編	『朝鮮日々記を読む—真宗僧が見た秀吉の朝鮮侵略—』	法蔵館
414	2000	羅東旭	「南海倭城の滴水瓦」	『倭城の研究』4
415	2000a	仲尾宏	『朝鮮通信使と壬辰倭乱』	明石書店
416	2000b	仲尾宏	「洛中洛外図にみる朝鮮使節と耳塚」	『(京都芸術短期大学紀要)瓜生』23号〔仲尾2000収録〕
417	2000	西尾孝昌	「壱岐・対馬の城—勝本城と清水山城—」	『倭城の研究』4
418	2000	橋本雄	「史料紹介:丹波国氷上郡佐治荘高源寺所蔵文書(続)」	『東京大学日本史学研究室紀要』4
419	2000	堀口健式	「南海倭城の石垣」	『倭城の研究』4
420	2000	松岡利郎	「倭城天守台実測概報」	『倭城の研究』4
421	2000	丸山雍成	「朝鮮降倭武将『沙也可』とはだれか」	廣渡正利編著『大蔵姓原田氏編年史料』文献出版
422	2000	宮武正登	「文禄・慶長の役(壬辰・丁酉倭乱)における大名陳跡の諸形態(3)」	『研究紀要』(佐賀県立名誤屋城博物館)6
423	2000	村井章介	「島津史料から見た泗川の戦い」	『歴史学研究』736
424	2000	山崎敏昭	「南海倭城の瓦類」	『倭城の研究』4
425	2001	北島万次(訳注)	李舜臣著『乱中日記』上・中・下(東洋文庫)	平凡社
426	2001	清水紘一	『織豊政権とキリシタン—日欧交渉の起源と展開—』	岩田書院

427	2001	曾根勇二	「朝鮮出兵をめぐる戦争体制と国内支配の実態」	歴史科学協議会編『歴史が動く時-人間とその時代-』青木書店
428	2001	津野倫明	「慶長の役における軍目付の実名について」	『ぐんしょ』54
429	2001	長谷川成一	「奥羽大名の肥前名護屋在陣に関する新史料について」	『市史ひろさき』10
430	2001	藤田達生	「海賊禁止令の成立過程」	『日本近世国家成立史の研究』校倉書房
431	2002	李元植	「講和使僧松雲大師と日朝善隣外交」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
432	2002	伊藤幸司	『中世日本の外交と禅宗』	吉川弘文館
433	2002	稲葉継陽	「戦国から泰平の世へ」	坂田聡・榎原雅治・稲葉継陽『村の戦争と平和』(日本の中世 12) 吉川弘文館
434	2002	太田秀春	「日本・韓国における倭城関係文献目録(補遺)」	『倭城の研究』5
435	2002	大曲敦	「父 大曲美太郎と釜山考古会」	『倭城の研究』5
436	2002	大曲美太郎	「釜山の古蹟—釜山港に面する地方—」	『倭城の研究』5
437	2002	奥村信一	「韓国蔚山広域市蔚州郡西生浦倭城整備計画(案)」	『倭城の研究』5
438	2002	長節子	『中世国境海域の倭と朝鮮』	吉川弘文館
439	2002	角田誠	「明洞倭城の縄張り」	『倭城の研究』5
440	2002a	北島万次	『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』	校倉書房
441	2002b	北島万次	『秀吉の朝鮮侵略』(日本史リブレット 34)	山川出版社
442	2002c	北島万次	「壬辰丁酉倭乱と松雲大師」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
443	2002	金栄作	「松雲大師の加藤清正との外交談判」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
444	2002a	黒田慶一	「西生浦倭城の特集にあたって」	『倭城の研究』5
445	2002b	黒田慶一	「明洞倭城の陶磁器・瓦類」	『倭城の研究』5
446	2002	黒田慶一・中村仁美	「熊川倭城の陶磁器・瓦類」	『倭城の研究』5
447	2002	曹国慶	「明朝の将校劉綎と朝鮮の義僧松雲大師による協同抗倭戦争」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
448	2002	高田徹	「熊川倭城の縄張り」	『倭城の研究』5
449	2002	鄭柄朝	「松雲大師惟政の思想と仏教史的 position」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
450	2002	陳尚勝	「壬辰倭乱時の明王朝と朝鮮の対日外交」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
451	2002	仲尾宏	「徳川家康と朝鮮・試論」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
452	2002	仲尾宏・曹永祿(編)	『朝鮮義僧将・松雲大師と徳川家康』	明石書店
453	2002	中砂明徳	『江南—中国文雅の源流—』(講談社選書メチエ)	講談社
454	2002	西川禎亮	「西生浦倭城の築造方法」	『倭城の研究』5
455	2002	西川禎亮ほか	「西生浦倭城石垣調査報告(2001 年度)」	『倭城の研究』5
456	2002a	貫井正之	「壬辰丁酉倭乱および戦後の日朝交渉における惟政(松雲大師)の活動に関する考察」	『朝鮮学報』178

457	2002b	貫井正之	「義僧兵将・外交僧としての松雲大師の活動」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
458	2002	河宇鳳	「国交再開期における松雲大師の活動とその意義」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
459	2002a	原田二郎	『釜山城』	『倭城の研究』5
460	2002b	原田二郎	『文禄役釜山及東萊戦史』	『倭城の研究』5
461	2002a	堀口健式	「熊川倭城の石垣」	『倭城の研究』5
462	2002b	堀口健式	「明洞倭城の石垣」	『倭城の研究』5
463	2002	松岡利郎	「西生浦倭城の建築設計に関する試み」	『倭城の研究』5
464	2002	関德基	「壬辰倭乱前後の東北アジア国際秩序の変化」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
465	2002a	山崎敏昭	「西生浦倭城の瓦類」	『倭城の研究』5
466	2002b	山崎敏昭	『子馬倭城』について	『倭城の研究』5
467	2002	吉井秀夫	「釜山考古会とその活動について」	『倭城の研究』5
468	2002a	米谷均	「松雲大師の来日と朝鮮被虜人の送還について」	[仲尾宏・曹永祿 2002 収録]
469	2002b	米谷均	「豊臣政権期における海賊の引き渡しと日朝関係」	『日本歴史』650
470	2002	脇田修	『倭城の研究』によせて	『倭城の研究』5
471	2003a	跡部信	「秀吉の朝鮮渡海と国制」	『(大阪天守閣)紀要』31
472	2003b	跡部信	「書評:池享編『天下統一と朝鮮侵略』」	『織豊期研究』5
473	2003	稲葉継陽	「兵農分離と侵略動員」	[池 2003 収録]
474	2003	岡野友彦	『源氏と日本国王』(講談社現代新書)	講談社
475	2003	池享(編)	『天下統一と朝鮮侵略』(日本の時代史 13)	吉川弘文館
476	2003	池享	天下統一と朝鮮侵略	[池 2003 収録]
477	2003	岸田裕之	『八箇国御時代分限帳』にみる毛利氏の朝鮮への動員体制	岸田裕之編『中国地域と対外関係』山川出版社
478	2003	佐藤和夫	「朝鮮出兵と拉致問題―日朝交渉史の断面―」	『政治経済史学』447
479	2003	白峰旬	『豊臣の城・徳川の城』	校倉書房
480	2003a	中野等	「唐入り」と兵站補給体制	[池 2003 収録]
481	2003b	中野等	「文禄期発給秀吉朱印状の年紀再考」	『日本歴史』665
482	2003	貫井正之	「南冥学派の壬辰義兵活動」	『歴史学研究』778
483	2003	久芳崇	「朝鮮の役における日本兵捕虜」	『東方学』105
484	2003	堀新	「信長・秀吉の国家構想と天皇」	[池 2003 収録]
485	2003	山内民博	「倭乱記録と顕彰・祭祀―壬辰丁酉倭乱と朝鮮郷村社会―」	『新潟史学』50
486	2003	米谷均	「後期倭寇から朝鮮侵略へ」	[池 2003 収録]
487	2003	李元植	「韓氏両世墨妙」の発見に寄せて―壬辰倭乱艾主事所管文書を中心に―	『朝鮮学報』188
488	2003	ロビンソン、ケネス	「朝鮮後期の刊本地図帳に見える日本図」	『(ICU アジア文化研究所)アジア文化研究』別冊 12

489	2004	川越泰博	「史料紹介:『全浙兵制考』の撰者について」	[村井 2004a 収録]
490	2004a	北島万次	「巨済島の倭城址についての覚書」	[村井 2004b 収録]
491	2004b	北島万次	「全羅左水營の職人集団について—李舜臣の水軍を支えた人々—」	[村井 2004b 収録]
492	2004	豊見山和行	『琉球王国の外交と王権』	吉川弘文館
493	2004	藤井譲治	「16・7世紀の生産・技術革命」	歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座5 近世の形成』東京大学出版会
494	2004a	宮紀子	「『混一疆理歴代国都之図』への道」	NHK「文明の道」プロジェクト(編)『モンゴル帝国』(NHK スペシャル文明の道5)NHK 出版
495	2004b	宮紀子	「『混一疆理歴代国都之図』への道—14世紀四明地方の『知』の行方—」	藤井譲治・杉山正明・金田章裕編『絵図・地図からみた世界像』(京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」中間報告書)京都大学大学院文学研究科
496	2004a	村井章介(編)	『8-17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流 —海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に—』(上巻)	平成 12~17 年度日本学術振興会科学研究費報告書
497	2004b	村井章介(編)	『8-17世紀の東アジア地域における人・物・情報の交流 —海域と港市の形成、民族・地域間の相互認識を中心に—』(下巻)	平成 12~17 年度日本学術振興会科学研究費報告書
498	2004c	村井章介	「『東アジア』と近世日本」	歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座5 近世の形成』東京大学出版会
499	2004a	米谷均	「『全浙兵制考』「近報倭警」にみる日本情報」	[村井 2004a 収録]
500	2004b	米谷均	「訳注『全浙兵制考』「近報倭警」」	[村井 2004a 収録]
501	2004c	米谷均	「訳注『敬和堂集』「請計処倭酋疏」」	[村井 2004a 収録]
502	2004d	米谷均	「『仙巢稿別本』所収文書一覧表」	[村井 2004a 収録]